

国際文化学域

教学の手引き

2019年度入学生用

英米文学専攻
西洋史学専攻
文化芸術専攻

文学部

国際文化学域

英米文学専攻

西洋史学専攻

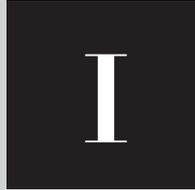
文化芸術専攻

Table of Contents

I	国際文化学域	
1	教学理念・教育目標	3
2	履修の仕方、学域から専攻への流れ	3
3	1回生の専門科目概要	3
4	研究入門の学び方	5
5	リテラシー入門の学び方	5
II	英米文学専攻	
1	教学理念・教育目標	9
2	履修の仕方と履修モデル	9
3	2回生からの専門科目概要	10
4	専門演習Ⅰ～Ⅳ	12
5	卒業論文	13
6	専門科目一覧	14
7	履修方法	15
8	その他	15
III	西洋史学専攻	
1	教学理念・教育目標	27
2	履修の仕方と履修モデル	27
3	2回生からの専門科目概要	29
4	専門演習Ⅰ～Ⅳ	32
5	卒業論文	32
6	専門科目一覧	33
7	履修方法	34
8	その他	34
IV	文化芸術専攻	
1	教学理念・教育目標	41
2	履修の仕方と履修モデル	41
3	2回生からの専門科目概要	45
4	専門演習Ⅰ～Ⅳ	49
5	卒業論文	49
6	専門科目一覧	50
7	履修方法	52
8	その他	52
V	テーマリサーチ型ゼミナール (TRS)	61

「教学の手引き」の使い方

- ・本書は、「学修要覧」や「履修・登録の手引き」と合わせて、学びの指針として役立ててください。
- ・本書は、卒業まで使用します。再配布しませんので大切に扱ってください。
- ・本書の記載内容に追加・変更があれば、manaba+Rで随時発表します。定期的に確認をおこなってください。



國際文化學域

1 教学理念・教育目標

グローバル化の進む現代においては、世界各地の多種多様な民族や文化が相互に接触・交流しながら影響しあい、一つの運命共同体となりつつあります。このように世界が大きく変化していく中で、人々が他者を尊重しつつ、いかに共生できるかが、現代の人間にとって差し迫った問題となっています。それゆえ、世界の成り立ちを過去から歴史的に理解し、それを踏まえて多種多様な文化と向き合う態度を培うことは、きわめて重要な課題となります。

国際文化学域が展開する教学の最大の特徴は、芸術・文学・歴史・思想などの、人間文化・社会の諸領域に関連する諸学問を横断し、さまざまな時代と地域を視野に入れつつ、多様な価値観のもとに世界を深く理解することを目指す点にあります。そのためには、現代の人文諸科学の方法や成果を学び、自らの感性、歴史的・論理的思考力、表現力を高めると共に、英語を軸として、諸外国語の高度な運用能力を習得する必要があります。本学域では、以上のような専門的かつ先端的な人文学諸領域の学習・研究を通じて、国際的な視野と展望を持った人材を育成します。

2 履修の仕方、学域から専攻への流れ

国際文化学域は、「英米文学専攻」、「西洋史学専攻」、「文化芸術専攻」から構成されます。各専攻への分属は、1 回生 4 月のオリエンテーション時及び 9 月下旬から 10 月上旬に実施される専攻希望調査を経て、12 月上旬に実施される本申請によって行われます。

専攻が決定する前の 1 回生次における履修の中心を成す科目は、「リテラシー入門」、「研究入門Ⅰ・Ⅱ」、「国際文化入門講義」です。「リテラシー入門」では、学術的な文章を書く技術、各種インフォメーションを扱う技術など、大学の学びに必要な不可欠となる基礎的な知識と技能を身につけると共に、卒業後の進路を見据えつつ、これから始まる 4 年間の大学生活を設計し、充実した大学生活を送るための自律性を養います。「研究入門」では、人文学系の学問には必須となる文献資料や図像を読み解く技術を学び、自ら立てた問いに関するリサーチを行い、その研究成果をプレゼンテーションとして発信する能力を実践的に養います。1 回生春学期に開講される「国際文化入門講義」では、国際文化学域を構成する 3 専攻によるリレー講義を通して、各専攻の専門的な学びに触れます。

初年次教育という目的のもとにゆるやかにかつ有機的に連携する「リテラシー入門」、「研究入門Ⅰ・Ⅱ」、「国際文化入門講義」では、大学での 4 年間の学びの基礎を築き、国際文化全般に関する初歩的な知見を獲得します。これらの科目は、最終的には、各自が自らの学問的関心のありかを見極め、進むべき専攻を主体的に決める上での貴重な啓発の場を与えてくれることでしょう。

分属については、4 月のオリエンテーションや「研究入門Ⅱ」の授業で詳細を説明するので、必ず出席し、所定の手続きをするようにして下さい。

3 1 回生の専門科目概要

【研究入門Ⅰ・Ⅱ】（コア科目）

大学における研究活動に必要とされる基礎的な技術を習得し、歴史的思考力、批評的思考力、論理的伝達力を身につけ、主体的な学びの姿勢を確立することを目指します。具体的には、「リテラシー入門」との連携を図りつつ、問いの立て方、研究テーマの設定の仕方、文献探索の方法、様々な文献読解の技法、口頭発表や討論の仕方について、グループディスカッションやグループワークを通して実践的に学びます。

【国際文化入門講義】（コア科目）

この授業は、国際文化を多角的に捉えるために、国際文化学域を構成する 3 つの専攻である「英米文学専攻」、「西洋史学専攻」、「文化芸術専攻」によるリレー形式で講義を行います。3 専攻それぞれの学問分野の概略を理解し、基礎的事項や研究動向について学びます。

【英米文学概論Ⅰ】（コア科目）

英米文学に関心のある学生を対象として、英米文学研究に必須の基礎知識を習得することを目的とした授業です。イギリス・アメリカを中心とする英語圏文学のさまざまなジャンル（詩・演劇・小説）の特性や、具体的な作品をめぐる文化的背景、問題点について学びます。

【英書講読（Intermediate）】

英米文学に関心のある学生を対象として、比較的平易な英語で書かれた英語圏の文学作品を原書で講読する能力を養います。詩、小説、演劇、文学評論等の精読を通して、文学作品の英語の特性を学ぶ授業です。

【西洋史概論Ⅰ】（コア科目）

西洋の前近代（古代・中世）について、その時期の全体的な展望が持てるように概観することが目的の講義です。この講義を通じて、西洋の前近代に関する基本的な諸問題についての知識を身につけるとともに、自分の関心が西洋史の展開の中でどのような位置にあるかを知ることができます。また、狭い専門に閉じこもることなく、ゼミなどでさまざまなテーマに関心を持ち、発言する／できるようになるためにも必要な「基礎教養」となる講義です。

【西洋史概論Ⅱ】（コア科目）

西洋の近現代について、その時期の全体的な展望が持てるように概観することが目的の講義です。この講義を通じて、西洋の近現代に関する基本的な諸問題についての知識を身につけるとともに、自分の関心が西洋史の展開の中でどのような位置にあるかを知ることができます。また、狭い専門に閉じこもることなく、ゼミなどでさまざまなテーマに関心を持ち、発言する／できるようになるためにも必要な「基礎教養」となる講義です。

【文化芸術概論】（コア科目）

文化芸術専攻は様々な学問分野の教員から構成されています。2回生からの専攻の学びでは、そうした複数の学問分野を身につけながら、それらを組み合わせて、多様な問題にアプローチしてゆくトレーニングを積むこととなります。その紹介編として、この文化芸術概論は3人の異なった学問分野の教員によるリレー方式をとり、文化芸術専攻が扱う学問分野および問題に対し、どのようにして多様なアプローチが可能となるのか、その方法の一端を明らかにしていきます。

《1回生の必修科目・登録必修科目》

（2回生以降に所属する各専攻の必修科目・登録必修科目については、各自が所属する専攻の履修方法をご覧ください。）

【登録必修科目】必ず登録・受講しなければならない科目

科目区分	科目名	単位数	配当回生	履修方法
入門科目 (初年次科目)	国際文化入門講義	2	1回生のみ	2単位
	リテラシー入門	2	1回生のみ	2単位
小集団科目	研究入門Ⅰ	2	1回生のみ	2単位
	研究入門Ⅱ	2	1回生のみ	2単位
英米文学専攻概論※	英米文学概論Ⅰ	2	1回生以上	2単位
西洋史学専攻概論※	西洋史概論Ⅰ	2	1回生以上	2単位
	西洋史概論Ⅱ	2	1回生以上	2単位
文化芸術専攻概論※	文化芸術概論	2	1回生以上	2単位

表内の※の区分内の科目は、2回生以上で所属する専攻にのみ登録必修となる科目です。希望する専攻の概論は履修すること。また、いずれの概論も学域の教学に深く関連のある科目なので、希望する専攻以外の科目も積極的に受講して下さい。ただし、専攻分属の結果、配属された専攻の概論が未履修の場合は、分属後に必ず履修すること。

4 研究入門の学び方

大学の学びでは、自ら学問的な問いを立て、綿密な分析と調査を行い、その研究成果を論文あるいはプレゼンテーションとして発表することが要求されます。「研究入門Ⅰ・Ⅱ」は、こうした主体的な学びを確立するために必要な技術を実践的に学ぶ小集団科目です。授業は、個人、あるいはグループによる発表・ディスカッションを主として進められ、「リテラシー入門」と連動しつつ、「考え、調べ、表現する」技術を習得します。テーマを設定する着想力、資料を調査し分析するリサーチ力、対象となる事象や問題を批判的・歴史的に捉える人文学的な思考力、そして自らの考えを論理的に述べる発信力—こうした技術を実践的に学ぶ「研究入門」は、1回生の学びの中軸となる科目であり、4年間の学びの礎となるでしょう。

5 リテラシー入門の学び方

「リテラシー入門」は文学部の1回生対象の科目で、全員が受講する登録必修科目です。授業は、日本語リテラシー・情報リテラシー・キャリアリテラシー・スチューデントリテラシーの4要素から成り立っています。リテラシーとはもともと文字を読み書きする能力のことでしたが、今では様々な情報を理解して、自分と周りの人々（社会）とのコミュニケーションに役立てる能力を幅広く指す言葉として使われるようになったものです。

「日本語リテラシー」はライティングスキルを涵養するためのもので、大学生としての日本語ライティング（作文）能力を身につけます。批判的視点を養う、自分の視点を客観的な証拠に基づいて立証する、論理的に文章を構成するスキルを学んだ上で、アカデミックな文章（論文）を書く力を養うことを目指します。

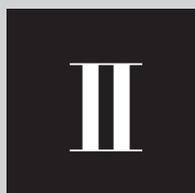
「情報リテラシー」はインフォメーションスキルを身につけるためのもので、立命館大学で必要不可欠なメールシステム、学習支援システム manaba+R、CAMPUS WEB などの情報環境を理解し、文学部生としてふさわしい口頭報告やレポート・論文を仕上げるための Microsoft Word や PowerPoint などの使用方法を学びます。これらのスキルを修得することで情報化社会で活躍するための基礎を得るとともに、インターネットを使用する時のマナー・倫理を身につけます。

「キャリアリテラシー」はキャリアスキルを早期に修得するためのもので、卒業後の自分の人生をイメージしながら、これからの4年間の大学生活を設計し、充実した学修や課外活動に取り組む能力を身につけます。単なる就職活動のコツを学ぶ授業ではありません。

「スチューデントリテラシー」はスチューデントスキルを身につけるためのもので、大学生として充実した学修・生活ができる能力を獲得します。具体的な授業の内容は、ノートの取り方の指導、創作物（レポート・論文）作成にあたっての倫理的な注意事項、健康な生活を送るための諸注意などです。

最後に「リテラシー入門」の到達目標は、以下の通りです。

- (1) 自分の考えを論理的な文章として表現できる。
- (2) コンピューターを大学での学修のツールとして使うことができる。
- (3) 自分のキャリアを設計するという目的意識を持って学修と課外活動を行なうことができる。
- (4) 大学生として充実した学修・生活ができる。



英米文学専攻

1 教学理念・教育目標

英米文学研究は、英語という一言語の長い歴史の中で生み出された文学作品の魅力に触れながら、多様な視点や価値観を涵養すると共に、様々な時代や地域の違いを超えた人間の普遍性とも出合う学問です。英米文学専攻は、英米を中心とする英語圏の文学作品の研究を通して、英語の言語表現の特性、作品世界を構築する文化的・歴史的背景、そして人間と社会の関係のあり方について理解を深めると共に、言語的感性を高め、異文化への眼差しを育むことを基本理念としています。

グローバル社会における共通語としての位置づけが確立された今、英語に対する需要はますます高まっています。英米文学専攻では、「英文演習」「翻訳演習」をはじめとするスキル系科目を開講し、高度なコミュニケーション能力の養成も目指します。その一方で、加速する情報化・国際化の流れに真に対応し得るためには、「読む・書く・聞く・話す」といった4技能の総合的英語運用能力に加えて、他者の考えを正しく理解した上で、深い分析と学識に基づいて自らの考えを言語化する高度な表現力と論理的思考力が求められます。あまたの可能な読みの中から自らの読みを構築し、今度はそれを自らの言葉で肉付けしていく—その創造的な営為は、「グローバル・リテラシー」が単一の価値観を生み出す誤ったグローバリゼーションに墮すことを阻み、他者を受容し、自己を形成する、21世紀に必要なとされる真の国際人の育成に大きく貢献するでしょう。

2 履修の仕方と履修モデル

英米文学専攻での履修の「軸」をなすのは、「基礎講読Ⅰ・Ⅱ」、「専門演習Ⅰ・Ⅱ」、「専門演習Ⅲ・Ⅳ」という回別に設けられた小集団科目です。2回生配当の「基礎講読」では、ひとりひとりの自主的・意欲的学習と共同学習・グループ研究を通じて、専門研究の基礎的方法を学びます。

4年間の学びの流れを以下に略述します。まずは、1回生秋学期から開講される専攻のコア科目である「英米文学概論Ⅰ」を履修し、専門領域についての基礎的な知識を修得します。「英書講読 (Intermediate)」は必修科目ではありませんが、英語テキストの本格的な読解を行いますので、英米文学専攻志望者は受講するとよいでしょう。2回生に進むと、「英米文学概論Ⅱ」と、やはり専攻のコア科目であり、より専門的な内容を扱う「英文学史Ⅰ・Ⅱ」と「米文学史Ⅰ・Ⅱ」を履修することが望まれます。さらに「英書講読 (Advanced)」「英作文法」「英文演習」(以上3科目は必修科目ですのでそれぞれ必要な単位数を修得して下さい)「英会話」をそれぞれ履修することにより、総合的な英語力の向上をめざします。その他、受講生ひとりひとりの学問的関心に応じて、テーマを絞った「英米文学特殊講義」を受講し、専門知識の幅を広げてください。

もちろん、低回生では、これらの専門科目以外に、外国語科目の学習によって実践的な語学力を高め、教養科目や人文学共通科目の履修を通じて、各人の視野を広げる必要があります。とくに人文学共通科目の諸科目のうち、専攻に関連する分野の講義や講読を積極的に受講してみることも有意義であると思われます。できるだけ早期に研究目標を確立することを目指し、2回生ではいろいろな科目を履修し、各自の研究テーマを考える必要があります。また、副専攻で新しい分野の学問に挑戦することも、自身の可能性を広げる上で大いに役立つでしょう。

なお、コア科目に指定されている講義科目の履修は、それぞれの開講回生に制限するものではありません。たとえば、2回生以降でも未履修の概論科目を履修できますし、3回生以降に「英文学史」や「米文学史」を履修することもできます。

3回生の「専門演習Ⅰ・Ⅱ」は、英米文学の領域やジャンルを考慮して編成されます。そして「専門演習Ⅰ・Ⅱ」等で学んだことを基礎として、各自が自分の研究テーマを遅くとも3回生終了時には確定し、4回生の「専門演習Ⅲ・Ⅳ」で、4年間の学びの集大成としての卒業論文作成に取り組むことになります。以下の「専門演習Ⅰ～Ⅳ」の項目を参照してください。

履修モデル

	専攻専門科目			専攻専門科目以外
	必修科目	登録必修科目	必修/登録必修以外の専攻科目	
1 回生		リテラシー入門 研究入門Ⅰ・Ⅱ 英米文学概論Ⅰ 国際文化入門講義	英書講読 (Intermediate)	西洋史概論Ⅰ・Ⅱ (西史) 文化芸術概論 (文芸) 教養ゼミナール (教養) 映像と表現 (教養) 美と芸術の論理 (教養)
2 回生	英書講読 (Advanced) 英作文法 英文演習	基礎講読Ⅰ・Ⅱ 英米文学概論Ⅱ 英文学史Ⅰ・Ⅱ 米文学史Ⅰ・Ⅱ	英会話Ⅰ・Ⅱ 英米文学特殊講義	専門外国語Ⅰ・Ⅱ (人文) 神話学Ⅰ・Ⅱ (人文) 西洋史概論Ⅲ・Ⅳ (西史) 西洋美術史 (文芸) ラテン語Ⅰ・Ⅱ (人文) 比較文化講義 (文芸) ジェンダー論 (教養) 民族と芸術 (文芸) キリスト教文化史 (文芸) アカデミック・ライティング (人文) 文学部インターンシップ (人文) 英語アドヴァンスト・コース (イノベ)
3 回生	英書講読 (Advanced)	専門演習Ⅰ・Ⅱ	英語論文演習 翻訳演習 英米文学特殊講義	専門外国語Ⅲ・Ⅳ (人文) 比較文学論 (文芸) ヨーロッパ文化史 (文芸)
4 回生	専門演習Ⅲ・Ⅳ 卒業論文			

凡例：教養科目（教養）；人文学共通科目（人文）；西洋史学専攻（西史）；文化芸術専攻（文芸）

注) ①これは履修モデルです。この通り履修する必要はありませんし、この通り履修しても全ての必要単位を修得できるわけではありません。

また、表にある科目の履修セメスターも、必ずしも配当セメスター通りとは限りませんので注意してください。皆さんの関心に応じ、他の科目も自由に履修してください。

②必修、登録必修の区別については (p.15) を参照してください。

3 2 回生からの専門科目概要

1 回生 (以上) 配当科目

〔概論科目〕

〔英米文学概論Ⅰ〕 (コア科目)

イギリス・アメリカを中心とする英語圏文学のさまざまなジャンル (詩・演劇・小説) の特性や、具体的な作品をめぐる文化的背景、問題点について学び、英米文学研究に必須の基礎知識を習得します。

2 回生 (以上) 配当科目

〔小集団科目〕

〔基礎講読Ⅰ・Ⅱ〕 (コア科目)

英米文学研究のための基礎的な力を養成します。作品を単に訳読するのではなく、文学批評に必要とされる知識 (視点、隠喩など) を具体的な作品の解釈を通して実践的に学びます。文献探索、論文執筆、レジュメ作成、口頭発表の方法についても学んでいきます。

〔概論科目〕

〔英米文学概論Ⅱ〕（コア科目）

「英米文学概論Ⅰ」にひき続き、イギリス・アメリカを中心とする英語圏文学のさまざまなジャンル（詩・演劇・小説）の特性や、具体的な作品をめぐる文化的背景、問題点について学び、英米文学研究に必須の基礎知識を習得します。

〔講義科目〕

〔英文学史Ⅰ・Ⅱ〕（コア科目）

イギリス文学の歴史的な流れについて学びます。個々の作品を通史的な観点で捉えることで、イギリス文学の大きなうねりを巨視的に眺める視点を養い、作品のバックボーンを成す歴史的・文化的背景や時代思潮について考察します。

〔米文学史Ⅰ・Ⅱ〕（コア科目）

アメリカ文学の歴史的な流れについて学びます。個々の作品を通史的な観点で捉えることで、アメリカ文学の大きなうねりを巨視的に眺める視点を養い、作品のバックボーンを成す歴史的・文化的背景や時代思潮について考察します。

〔演習科目〕

〔英作文法〕

正確に英語を読み、書くために必要な基本的な文法事項を学び、パラグラフやエッセイを書く上での核となる正確な英語運用能力の基礎を身につけます。

〔英文演習〕

「英作文法」で学んだ文法知識を活用し、構成の整った文章を英語で書く技能を身につけます。英文読解能力と英作文能力を共に向上させ、会話・文章のいずれにおいても自信をもって英語表現ができるよう、応用力を伸ばします。

〔英会話Ⅰ・Ⅱ〕

日常生活で実際に運用できる基本的な会話能力を養い、向上させると共に、アカデミックなトピックについて英語でディスカッションし、論理的な議論を展開する高度な表現力を身につけます。

〔講読科目〕

〔英書講読（Advanced）〕

英語圏の文学作品を原書で講読する能力を養います。各自の関心に合わせて授業を選択し、詩、小説、演劇等、様々なジャンルの作品を精読し、多様な文学作品の英語を自在に読みこなす高度な文献読解力を身につけます。

〔特殊講義科目〕

〔英米文学特殊講義〕

イギリス・アメリカのみならず、広く英語圏と呼ばれる国々の文学作品や文化について、専門的な事象や話題を取り上げながら、多角的に考察します。

3回生（以上）配当科目

〔小集団科目〕

〔専門演習Ⅰ・Ⅱ〕（コア科目）

イギリス、アメリカを中心とする英語圏の文学作品を研究対象とする授業です。受講生による研究発表とディスカッションを中心に進めます。文学批評的視点を持ち、論理的かつ学術的な根拠に基づく意見を述べたり、論文を書く能力を身につけます。

〔演習科目〕

〔英語論文演習〕

2回生までで習得した英文作成技術をさらに向上させ、アカデミックなトピックについて英語で論文を書く訓練を行います。英語論文を読むことにより、論文構成の基本や文献資料の引用法を学び、数編の英文レポートの作成・添削により、高度な英語表現力を養成します。

〔翻訳演習〕

翻訳理論について学び、和文英訳や英文和訳の実践的な訓練を行います。英文読解力と日本語表現力を共に高めながら、翻訳技術の習得をめざします。

4回生（以上） 配当科目

〔小集団科目〕

〔専門演習Ⅲ・Ⅳ〕（コア科目）

「専門演習Ⅰ・Ⅱ」で培ったリサーチ力を土台に、さらに専門知識を高め、卒業論文作成のための指導を行います。

〔卒業論文科目〕

〔卒業論文〕（コア科目）

各自で研究テーマを設定し、専門演習や個人指導を経て、研究を進め、学術論文にまとめます。4年間で修得した文献収集の仕方、文学テキストの読み方、先行研究のリサーチ、分析や批評の仕方、論文執筆作成の方法を総合的かつ実践的に活用します。

4 専門演習Ⅰ～Ⅳ

3回生以上の小集団科目「専門演習Ⅰ・Ⅱ」「専門演習Ⅲ・Ⅳ」は、一般に「ゼミ」と呼ばれる演習形式の授業です。授業は、少人数体制で実施され、基本的には学生の発表やディスカッションを中心に進められます。担当教員との学問を通じた知的交流を図りながら、受講生同士が相互に啓発しあい、受講生一人一人が専門的かつ能動的な学びを実現することを目的にしています。

英米文学専攻では、3回生次のゼミ「専門演習Ⅰ・Ⅱ」については2回生次の12月、4回生次のゼミ「専門演習Ⅲ・Ⅳ」については3回生次の12月に、それぞれゼミ選択に関する説明会を「基礎講読」「専門演習Ⅱ」の授業時間内に実施しますので、必ず出席し、定められた期日までに申請・登録を行うようにして下さい。

3回生のゼミについては、「卒業論文」で扱う予定の分野を見据えて選択することを勧めます。もちろん、2回生秋学期の段階では具体的なテーマはまだ浮かばないと思いますが、ジャンルや作家などの方向性を基準にして選択するとよいでしょう。4回生のゼミは卒業論文に関する指導が中心になりますので、できるだけ近い分野を専門とする教員のゼミを選択することを勧めます。ただし、卒業論文はあくまでも個人がそれぞれの批評的関心や研究テーマに基づいて完成させるものですので、担当教員の専門分野に合わせる必要はありません。各自の卒業論文を作成する上で受けた指導を基準として選択するとよいでしょう。

また、文学部では、テーマリサーチ型ゼミナールの受講も可能です。英米文学専攻のゼミに加えてテーマリサーチ型ゼミナールも受講するかどうかは、3回生ゼミ選択の際に自分が何を研究したいのかをよく考えたうえで決定してください。

5 卒業論文

卒業論文は、大学における4年間の学びの総仕上げです。各自で研究テーマを設定し、専門演習や個人指導を経て研究を進め、学術論文にまとめます。卒業論文の作成に直接に取り組むのは4年生になってからですが、最近は就職活動にかなりの時間を割くことを強られる場合もあり、できるだけ早くからテーマを絞って準備を始めることが望まれます。

すぐれた論文を執筆するには、水準の高さを支える裾野の広がりが必要であり、そのためには低年生時から数多くの英語のテキストに接し、読解力を高めることが望まれます。遅くとも3年生終了時には卒業論文で扱う研究テーマを確定し、文献収集にも取り掛かってください。

卒業論文の指導は「専門演習Ⅲ・Ⅳ」や個人指導で行いますが、論文作成はあくまでも個人研究が中心となります。必要な文献については、図書館および文学部の文献資料室を積極的に利用すると共に、基本的なものを自分で揃える必要があります。なお論文作成の詳細については、以下の「その他」の項目を参照してください。

卒業論文審査の観点

1. 研究課題・テーマ（関心・意欲・思考・態度）
2. 研究資料・題材・先行研究（知識・理解・関心・態度）
3. 論文の展開（思考・判断・技能・態度）
4. 書式（表現・技能）

※卒業論文の評価の詳細については、提出する年度の『卒業論文』のシラバスを確認すること

6 専門科目一覧

教育目標

- ①英米文学研究の基礎をなす知識を有し、他の人文学的知と連携させることができる。
- ②英米文学研究における専門的な知識を有し、さらにそれを高度化することができる。
- ③専門的なテキストや資料を批判的に読解する能力を有する。
- ④実践的な英語コミュニケーション能力と豊かな言語表現力を有する。
- ⑤独自の批評的視点や問題意識をもって主体的に思考する。
- ⑥専門的知識をもって国際社会に貢献しようとする意欲と行動力を有する。

科目区分	科目名	配当回生	重複受講可能	コア科目	専攻学生のみ受講可	単位数	教育目標						履修方法
							①	②	③	④	⑤	⑥	
入門科目 (初年次科目)	国際文化入門講義	1回生のみ		※	※	2	○					○	登録必修
	*リテラシー入門	1回生のみ		※		2				○		○	登録必修
小集団科目	研究入門Ⅰ	1回生のみ		※	※	2	○		○				登録必修
	研究入門Ⅱ	1回生のみ		※	※	2	○		○				登録必修
	基礎講読Ⅰ	2回生のみ		※	※	2		○	○				登録必修
	基礎講読Ⅱ	2回生のみ		※	※	2		○	○				登録必修
	専門演習Ⅰ	3回生のみ	※	※		2			○		○		登録必修
	専門演習Ⅱ	3回生のみ	※	※		2			○		○		登録必修
	専門演習Ⅲ	4回生以上	※(注1)	※		2			○		○		4単位必修(注2)
専門演習Ⅳ	4回生以上	※(注1)	※		2			○		○		4単位必修(注2)	
卒業論文	卒業論文	4回生以上		※		4				○	○		必修
概論	英米文学概論Ⅰ	1回生以上		※		2	○		○				登録必修
	英米文学概論Ⅱ	2回生以上		※		2	○		○				登録必修
演習	英作文法	2回生以上			※	2				○	○		必修
	英文演習	2回生以上			※	2				○	○		必修
	英会話Ⅰ	2回生以上			※	2				○	○		
	英会話Ⅱ	2回生以上			※	2				○	○		
	英語論文演習	3回生以上	※	※		2				○	○		
翻訳演習	3回生以上			※		2				○	○		
講義	英文学史Ⅰ	2回生以上		※		2	○		○				4単位以上登録必修
	英文学史Ⅱ	2回生以上		※		2	○		○				
	米文学史Ⅰ	2回生以上		※		2	○		○				
	米文学史Ⅱ	2回生以上		※		2	○		○				
講読	英書講読(Intermediate)	1回生のみ			※	2			○	○			
	英書講読(Advanced)	2回生以上	※	※		2			○	○			4単位以上必修
特殊講義	英米文学特殊講義	2回生以上	※			2	○	○					

1回生配当の「国際文化入門講義」・「研究入門Ⅰ・Ⅱ」は、学域に所属する学生のみ受講可能とします。

*・・・「リテラシー入門」は基礎科目です。

注1) 重複受講が可能となるのは、年度を超えて同一セメスターで履修する場合に限りです。

注2) 専門演習Ⅲ・Ⅳについては合計で4単位までしか履修できません。

7 履修方法

【必修科目】卒業するために必ず単位を修得しなければならない科目

科目区分	科目名	単位数	配当回生	履修条件
講読	英書講読 (Advanced)	2	2 回生以上	4 単位以上必修
演習	英作文法	2	2 回生以上	2 単位必修
	英文演習	2	2 回生以上	2 単位必修
小集団科目	専門演習Ⅲ	2	4 回生以上	※ 4 単位必修
	ゼミナールⅢ	2		
	専門演習Ⅳ	2	4 回生以上	
	ゼミナールⅣ	2		
卒業論文	卒業論文	4	4 回生以上	4 単位必修

※ただし、卒業論文を執筆する 4 回生ゼミに限る。

【登録必修科目】必ず登録・受講しなければならない科目

科目区分	科目名	単位数	配当回生	履修条件
入門科目 (初年次科目)	国際文化入門講義	2	1 回生のみ	2 単位
	リテラシー入門	2	1 回生のみ	2 単位
小集団科目	研究入門Ⅰ	2	1 回生のみ	2 単位
	研究入門Ⅱ	2	1 回生のみ	2 単位
	基礎講読Ⅰ	2	2 回生のみ	2 単位
	基礎講読Ⅱ	2	2 回生のみ	2 単位
	専門演習Ⅰ	2	3 回生のみ	2 単位
	専門演習Ⅱ	2	3 回生のみ	2 単位
概論	英米文学概論Ⅰ	2	1 回生以上	2 単位
	英米文学概論Ⅱ	2	2 回生以上	2 単位
講義	英文学史Ⅰ	2	2 回生以上	2 科目 4 単位以上選択
	英文学史Ⅱ	2	2 回生以上	
	米文学史Ⅰ	2	2 回生以上	
	米文学史Ⅱ	2	2 回生以上	

8 その他

《卒業論文作成の手引き》

はじめに

以下は「専門演習Ⅲ・Ⅳ」を履修して卒業論文を作成するための手引きとして、

1. 日程ときまり
2. 論文の体裁について
3. 論文の形式
4. 日本語論文
5. 英語論文
6. 禁止事項
7. 付 録

の順で詳細を記し、卒業論文作成への便宜をはかるものです。テーマリサーチ型ゼミナールで卒業論文を作成する場合は、指導教員の指示にしたがってください。

1. 日程ときまり

- (1) 卒業論文の対象となる文学作品は、原作が英語で書かれているものです。日本文学、フランス文学、ドイツ文学等の英語翻訳版は原則として対象となりません。

論文の対象を作家による作品に限定しない場合も、担当教員の指導のもとに相当量の英文テキストを対象にしなければなりません。

- (2) 卒業論文題目の提出

毎年所定の期間に manaba+R に記載の方法で提出します。文学作品を対象とする場合、取り上げる作品名を記入すること。それ以外のテキストを対象とする場合は、提出前に必ず指導教員の確認を得ること。詳細については提出する年度の履修・登録の手引きの「『卒業論文』の提出について」に従うこと。以後の変更は原則として認めません。

- (3) 審査委員

原則として2名の教員が審査にあたります。うち1名は「専門演習Ⅲ・Ⅳ」の担当教員ですが、他の1名は題目提出後に発表されます。

- (4) 論文の提出

春学期あるいは秋学期それぞれに指定された日時までに2部提出します。締め切り日時を確認し厳守すること。機器やプリンター等の故障によって提出できなかったなどは一切理由にならないので、余裕を持って完成させるよう心がけてください。

- (5) 口頭試問

提出された論文について、指定された期間内に行われます。その際取り上げた作品の使用原書、および論文のコピーを必ず持参すること。口頭試問は、提出された論文を公正に審査し的確な評価を下すのに不可欠の要件となるものですから、指定された日時に必ず出席すること。試問期間中の海外旅行、ホームステイなどは（語学研修を目的とするものも含めて）認めません。

卒業論文提出までの手続きについては提出する年度の履修・登録の手引きの「『卒業論文』の提出について」を参照すること。

2. 英米文学専攻「卒業論文」の体裁について

本文の体裁	A 4用紙（縦長） 原則としてワープロを使うこと
縦書・横書の指定	横書
文字数に関する指定	1行あたりの文字数：40字 1頁あたりの行数：35行
枚数等に関する指定	9枚以上15枚以下 英文論文の場合、A 4用紙で、1行あたり65ストローク、1頁25行でタイプ、15枚以上30枚以下
その他の注意	目次を巻頭に付す。注は巻末にまとめて掲げること。つづいて参考文献を巻末に付す。目次、注、参考文献、Summary等は枚数に含めない。
表紙等に関する体裁	フラットファイル（色指定なし）
大きさ	A 4
綴じ辺	短辺綴じ（上辺綴じ）
題目用紙	manaba+Rよりダウンロードし、記入の上、表紙に貼付すること。
審査教員用紙	manaba+Rよりダウンロードし、記入の上、表紙の裏に貼付すること。

3. 論文の形式

(1) 論文題目

提出時に、確定した論文題目を以下の要領で表紙に記します。

例 (和文)

<p>20××年度卒業論文</p> <p><i>Great Expectations</i> 研究 —Pip の精神的成長について</p> <p>英米文学専攻 学生証番号 氏名</p>	<p>20××年度卒業論文</p> <p>『大いなる遺産』研究 —ピップの精神的成長について</p> <p>英米文学専攻 学生証番号 氏名</p>
--	---

例 (英文)

Functions of the Fool in *King Lear*

A Thesis
Presented to
The Faculty of the Department of English
and American Literature
Ritsumeikan University

In Partial Fulfillment
of the Requirements for the Degree of
Bachelor of Arts

by
RITSUMEI Hanako
1675 × × × × × × - ×
December 20 × ×

(2) 目次

章分けして巻頭に目次をつけます。原則として各章にタイトルをつけます。

(3) 論文の構成

論文の構成は多様です。付録に紹介されている文献や、『立命館文学』、『立命館英米文学』、その他国内外の学術雑誌に収められている論文を日ごろ読んで、参考にするのがよいでしょう。

論題の提示、その展開、そして結論、少なくともこれら3つの部分は、どのような論文にも含まれています。明確な問題意識に根ざした、実証的な論証がなされるべきです。

(4) 引用と注

和文論文においては、英文の書物（作品・研究書）からの引用は日本語に自訳して本文に入れ、原文を注に示します。ただし英語表現の細かい部分を論じようとするときなどは、原文のまま本文中に引用する場合もあるでしょう。その時は自訳を注に記します。既訳を参照した場合はその旨注に明記してください。

注は番号順に巻末に付します。注には引用の出所（著者名、書名、出版社、出版年、頁数）を明記してください。

ただし、劇作品からの引用の出所は何幕何場とし、詩劇であれば行数も示します。詩作品からの引用の場合は行数を示します。長詩では巻・篇数などと共に行数を示します。

他人の説を引用あるいは参照した時は、下の例のように注によって出所を明示しなければなりません。本文のその箇所に注番号をつけ、出所を巻末注に明記します。

(5) 引用文献表

巻末に引用文献表をつけ、(扱った作品の使用した版を含む) 引用した文献を以下の書式に従い全て列挙します。

- ① 著者名、書名、出版情報（出版社と出版年）を示し、項目ごとにピリオドで区切ります。著者名については、洋書の場合は、姓を先に書くこと。
- ② 学術論文の場合は、著者名、論文題目、学術雑誌名、巻数、号数、発行年、頁数を示します。データベースから論文をダウンロードした場合は、雑誌論文の情報のあとに、データベース名を記します。
- ③ 各項目で2行以上にわたる場合は、ぶら下げ書式で2行目以降を記します。
- ④ 文献をそれぞれの著者の姓のアルファベット順に並べます。

詳細については、下記の見本を参照してください。また、最新の『MLAハンドブック』や *MLA Handbook* などの標準的なスタイルマニュアルを参照し、ゼミ指導教員の指示に従ってください。

(見本)

引用文献

バイヤール、ピエール『アクロイドを殺したのは誰か』大浦康介訳、筑摩書房、2001年。

Eagleton, Terry. *The English Novel: An Introduction*. Blackwell Publishing, 2005.

Graham, T. Austin. "Chapter 18: Jazz." *American Literature in Transition, 1920-1930*, edited by Ichiro Takayoshi, Cambridge UP, 2018, pp. 358-72.

Grossman, Allen. "Hart Crane and Poetry: A Consideration of Crane's Intense Poetics with Reference to 'The Return.'" *ELH*, vol. 48, no. 4, 1981, pp. 841-79.

平石貴樹『アメリカ文学史』松柏社、2010年。

久保拓也「『子ども』と『障害』から考えるマーク・トウェイン」『マーク・トウェイン——研究と批評』第12巻、2013年、pp. 36-43。

Lahiri, Jhumpa. *The Namesake*. Houghton Mifflin, 2003.

—. "Unaccustomed Earth." *Unaccustomed Earth*. Knopf, 2008, pp. 3-59.

三村尚央「『わたしを離さないで』に描かれる記憶の記念物の手触りをめぐる考察」『カズオ・イシグロ「わたしを離さないで」を読む——ケアからホロコーストまで』田尻芳樹、三村尚央編、水声社、2018年、pp. 197-211。

Morrison, Toni, Mario Kaiser and Sarah Ladipo Manyika. "Toni Morrison in Conversation." *Granta*, 29 June 2017, granta.com/toni-morrison-conversation/.

Schultz, Elizabeth. "The Power of Blackness: Richard Wright Rewrites *Moby-Dick*." *African American Review*, vol. 33, no. 4, 1999, pp. 639-54. JSTOR.

- (6) 和文論文の場合、Summary（英文による要約）を提出してください。
 （提出期限、提出方法等は、指導教員の指示に従うこと）

4. 日本語論文

- (1) 書き出しおよび改行の際は、必ず最初の1字分をあけます。
- (2) 行頭に符号やくりかえし記号（々）を据えてはいけません。文の終止符号が行末にきた場合は行末の文字と一緒に書き込みます。
- (3) 英文は半角とします。
- (4) 行末における英字の記入については、音節の区切り（辞書で確かめること）に注意してください。
- (5) 長い引用（3行以上）はその前後に空白の行を設け、本文より全体を1字分ずらせて書いてください。
- (6) 注番号は、最後の文字の右上に書きます。
- (7) 引用を中略するとき、和文では「……」または「—（中略）—」記号を、英文では“...”を用います。
- (8) 新しい章は4行あけて始めます。

5. 英語論文

英米文学専攻の学生として、卒業論文を英語で書くことは大いに望ましいことです。そのためには4回生までに英文論文をできるだけ多く読み、「英語論文演習」を受講するなどして、正しい英文を書く力を十分つけておくことが前提となります。英文で書く場合でも、対象とする作品を精読して、正しく理解していることが肝要であるのは和文論文の全く同じです。書くことに自信をもっていても、下書きおよび清書に十分な時間の余裕を置くことが絶対に必要な条件となります。

英文論文には、本文の書き方について和文の論文の場合とはちがった形式や約束があるので、市販の「英文論文の書き方」類（付録参照）を参考にすると同時に、「専門演習Ⅲ・Ⅳ」担当教員に早くから助言、指導をもとめてください。なお、新しい章は4行あけて始めます。

6. 禁止事項

卒業論文を作成する際には、扱った作品以外に、様々な研究書や批評などの資料を参照することも、自説を論じるには重要です。ただし、その際には出所を必ず注などで明記しなければなりません。そうしないで参照した場合は、たとえそれが書物や雑誌からであれ、インターネットからであれ、盗用であり、けっして許されることではありません。参考にした資料は、前述の「3. 論文の形式」の「(4)引用と注」、そして「(5)引用文献表」の例にならって、両方でその出所を明記してください。

7. 付 録

一般的参考文献

作品・作家・文学史を調べるに当たり、常に不可欠のものは、辞書および一般的参考文献です。どのような場合にもどのような書物を見ればよいかという基礎的な知識は、簡単なようで実はなかなか身につけません。以下辞書を中心に、専攻および学部備えてあるもののうちから、一般的なものをとりあげて紹介します。なお、個別の作家や作品に関する専門書は、修学館の人文系文献資料室にあるので利用してください。

《注意》

以下にあげる書物の末尾に（文献）と記されているものは人文系文献資料室に、（共）と記されているものは共同研究室にあることを示します。（両）は上記2室にあるの意味です。無印のものは、必要に応じて自分で備えてください。

なお、著名なものがほとんどであるので、編者名、出版社名を省くなど、表記法は略式にしています。

① 辞 書

(1) 一般的なもの

- Pocket Oxford Dictionary* (共)
Concise Oxford Dictionary (共)
Shorter Oxford English Dictionary (両)
Compact Edition of Oxford English Dictionary, 2 vols. (共)
Oxford English Dictionary, 2nd. Edition (文献)
Oxford Illustrated Dictionary (両)
American College Dictionary (両)
Webster's New World Dictionary (共)
Webster's Third New International Dictionary (両)
Webster's New Twentieth Century Dictionary (共)
Dictionary of American English, 4 vols. (文献)
Longman Dictionary of Contemporary English (両)
Idiomatic and Syntactic English Dictionary (共)
Shogakukan Random House English-Japanese Dictionary (共)
Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary (両)
Everyman's Encyclopaedia, 12 vols. (共)
Encyclopaedia Britannica, 30 vols. (共)
Encyclopaedia Americana, 30 vols. (共)
I-See-All: Picture Encyclopaedia, 5 vols. (共)

(2) 英文を書くためのもの

- Kenkyusha's New Japanese-English Dictionary* (共)
Kenkyusha's New Dictionary of English Collocations (両)
Basic English Writers' Japanese-English Wordbook (共)

(3) 方言・俗語

- English Dialect Dictionary, 6 vols.* (文献)
Dictionary of American Slang (両)
Dictionary of Americanisms, 2 vols. (文献)
The American Thesaurus of Slang (文献)

(4) 諺・引用・故事

- Oxford Dictionary of English Proverbs* (共)
Dictionary of American Proverbs and Proverbial Phrases (共)
Kenkyusha's Dictionary of English Quotations (共)
Brewer's Dictionary of Phrase and Fable (共)
英米故事伝説事典 (共)

(5) 作家・作品・固有名詞

- Concise Universal Biography* (文献)
Oxford Companion to English Literature (両)
Oxford Companion to American Literature (両)
The Reader's Encyclopaedia of English American Literature (文献)
Twentieth Century Authors (共)
Concise Encyclopaedia of English and American Poets and Poetry (共)
Dictionary of National Biography, 2 vols. (文献)
Century Encyclopaedia of Names, 3 vols. (共)
Webster's Dictionary of Proper Names (共)

(6) その他

- Oxford Classical Dictionary* (共)

Oxford Companion to Classical Literature (文献)

Kenkyusha's Dictionary of English Linguistics and Philology (共)

Seibido's Dictionary of English Linguistics

『キリスト教大事典』(共)

『英文学風物誌』(文献)

『英語歳時記』5巻(共)

ギリシャ、ラテン、独、仏、伊、露、各語の辞典(共)

シェイクスピアはじめ各詩人の Concordance (文献)

- (7) 永嶋大典『英米の辞書』(研究社)、加島祥造『英語の辞書の話』(講談社)、佐藤弘『英語辞書の知識』(八潮出版)などを読み、辞書の種類や特徴を学ぶことによって、辞書利用の効果が高まるであろう。

② 参考書

研究社 英米文学史講座 13巻(文献)

大修館 講座英米文学史 6巻(文献)

研究社 20世紀英米文学案内 19冊(両)

研究社 英文学ハンドブック「作家と作品」70冊

泰文堂 アメリカ小説研究(続刊中)

The Critical Heritage (文献)

Twayne's United States Authors Series (文献)

Twayne's English Authors Series (文献)

Twentieth Century Interpretations (文献)

Twentieth Century Views (文献)

Writers and Their Work (文献)

③ 雑誌掲載論文の検索

- (1) 本専攻には和・洋合わせて、148種の学術雑誌が所蔵されています。文献資料室にあるので、卒論作成に役立つ論文類をコピーするなど、積極的に活用してください。
- (2) 自分の卒論のテーマの研究に役立つ論文を検索するには、大学図書館にそのための案内や手引き類が常備されているので、それらを入手して参考してください。またオンラインでの論文・記事検索、E-journal検索も可能です。「専門演習Ⅲ・Ⅳ」担当教員と相談して図書館に申し込めば、ゼミ単位でガイダンスを受けることも出来ます。
- (3) 専攻、文学部、あるいは大学図書館の所蔵していない国内外の雑誌に載っている論文のコピーは、大学図書館一階のレファレンス・カウンターに申し込めば入手可能です。

④ 論文の書き方の手引き

内多 毅『英文学卒業論文ガイド』(英潮社)

長尾和夫監修『MLAハンドブック 第8版』(秀和システム)

鳥居次好・宇山直亮『英語論文とレポートの書き方』(英潮社)

渡部昇一(他)『論文・レポートの書き方』(スタンダード英語講座8)(大修館書店)

榎木伸明『卒論を書こう』(三修社)

小野俊太郎『レポート・卒論の攻略ガイドブック [英米文学編]』(松柏社)

トウラビアン著、高橋作太郎訳『英語論文の書き方』(研究社)

アンドルー・アーマー他著『アカデミックライティング応用編』(慶応義塾大学出版会)

ジョン・スウェイルズ／クリスティン・フィーク著、御手洗靖訳『効果的な英語論文を書く』(大修館書店)

樋口昌幸『英語論文表現事典』(北星堂)

崎村耕二『英語論文でよく使う表現』(創元社)

迫村純男(訳)『英語論文に使う表現文例集』(ナツメ社)

加藤恭子、ヴァネッサ・ハーディ『英語小論文の書き方』(講談社現代新書)

以上の文献のうち、文献資料室保管のものを利用する時は、在室TAの指示に従ってください。共同研究室を利用する場合は、規定にしたがってください。

《共同研究室の利用について》

英米文学専攻共同研究室は、研究や発表の準備をする場所として提供され、英米文学専攻の学生であれば誰でも利用できます（当該専攻の学生以外の利用は禁止です）。また、様々な回生の人と交流できる場所でもあります。しかし、あくまでも研究室であり、談話室とは異なりますので、その点に留意してマナーを守って使用しましょう。

1. 場 所 manaba+R で確認してください。
2. 使用時間 使用できる時間は、原則として8:30～22:00です。
なお、土日・祝日に利用する場合は、必ず事前に「文学部専攻施設等（夜間・休日・深夜）利用願」を提出し、許可を得るようにしてください。
3. 使用方法 学生証がカードキーとなっています。自動的に施錠されますので、学生証を共同研究室内に置いたまま、外へ出ないように注意してください。
4. 書籍について
共同研究室の書籍は共通の財産ですので、大切に扱きましょう。それらの書籍は、研究室内では自由に使うことができますが、すべて貸出禁止です。
5. パソコンについて
共同研究室のパソコンは、学修・研究等以外の目的での使用は不可とします。また、パソコンで自分の資料を作った場合は、必ずファイルはUSBメモリ等に保存して持ち帰り、パソコンの中に残さないようにしてください。また、使用後に電源を切るのを忘れないようにしましょう。
6. その他注意事項
 - ・共同研究室の清掃、整頓は、利用した人の責任において行ってください。ゴミの分別や消灯についても、徹底して行うようにしてください。
 - ・あくまで研究室であり、また近隣の教室では授業が行われています。室内および廊下での大声の談笑、騒音は慎んで下さい。
 - ・私物をおいたまま研究室を離れることのないようにしましょう。

《TAについて》

TA(Teaching Assistant) にはさまざまな業務内容がありますが、学部学生に関係するものとしては以下のものがあります。

- ①授業の補助
 - ②学部学生の教学の補助
 - ③学部学生の自主的学習活動への指導・援助
 - ④卒業論文作成の助言と補助
- ・ TA は主に大学院生です。
 - ・ ③、④の業務に従事するTAは英米文学専攻共同研究室（共研）に決められた時間に勤務しています。（勤務時間割表参照）
 - ・ 学習に関することをはじめ、何か疑問がありましたら遠慮なく質問してください。



西洋史学専攻

1 教学理念・教育目標

＜教学理念＞

西洋史学専攻では、時代的にも地域的にも、またテーマの上でも、きわめて多様な範囲を扱います。しかし、「なぜ学ぶか」という点では、次の2つのことが共通の目標となります。第一に、現代世界が歴史的にいかんして形成されたのかを、幅広い視野から理解すること。第二に、「過去」の時代を異なった社会・文化として認識し、それと「現在」の我々の社会・文化と対比することによって、人間の多様な在り方や可能性を知ること。このように歴史を学ぶことによって、自らの思考と感性を磨き、現代社会に生きる力を培うことができるでしょう。

以上の大きな目標に向かって、それぞれの問題意識から特定の時代、領域のテーマを見出し、そこから可能なかぎり全体を見渡せるような歴史的視野を広げていくことが大切です。専門としての歴史研究は、現代社会に生きるための視野の広さを身につけ、変化に対する鋭敏な感性と異なった社会・時代への豊かな想像力を培うために役立つはずで

＜教育目標＞

- ①現代世界の歴史的な成り立ちを理解するために、人文学の多様な方法論と思考を身につける。
- ②西欧・中東欧・ロシア・アメリカ、さらには植民地支配下の諸地域なども視野に入れて、世界史的な展望の中で「ヨーロッパ」を理解することができる。
- ③人文学的な知を用いて歴史書や史料を批判的に読み解くことができる。
- ④自分の調査・研究の成果を、口頭あるいは文章の形で表現することができる。
- ⑤歴史を学ぶことによって人間社会と文化の多様性と差異を認識し、他者に対する柔軟で謙虚な姿勢をとることができる。
- ⑥現代社会が抱える問題に対して、歴史が教えるところを参考に解決しようとする態度をもつ。

2 履修の仕方と履修モデル

【2 回生】

「基礎講読Ⅰ・Ⅱ」では本格的な歴史研究書（邦語）を読み解き、そこから歴史研究の実際（テーマや視点の立て方、史料の解釈など）を学びます。それによって、自分の卒論テーマについての構想を具体的なものにします。「西洋古代史研究」「史料から見る西洋古代史」「西洋中世史研究」「史料から見る西洋中世史」「西洋近代史研究」「史料から見る西洋近代史」「西洋現代史研究」「史料から見る西洋現代史」は最新の研究テーマの講義による専門的な西洋史研究の現状を紹介します。また「西洋史特殊講義」では西洋史研究に必要な手法や考え方を学ぶことができます。これらの多彩な講義から、自分の研究テーマへの刺激を得てください。

「西洋史文献講読Ⅰ」では、1回生での外国語学習の土台の上に、卒論研究に必要な英語文献の講読力を養います。英語の本が読めるようになれば世界が大きく開け、卒論テーマの選択の幅が広がります。

このように、2回生は日本語・英語を中心とした研究文献を読み解く技術を身につけ、研究力の土台を作るための重要な時期です。大学院進学を考えている人は特に語学に力を入れて、しっかりした卒論研究の計画を立てましょう。

【3 回生】

「専門演習Ⅰ・Ⅱ」では個人発表を行い、討論を通じて自分の卒論テーマを具体化し、基本文献の読み込みを進めます。3回生の秋学期から4回生の春学期にかけてが就職活動のピークとなりますから、なるべく早い段階で卒論の構想を考えていく必要があります。授業では2回生次に引き続き、「西洋史特殊講義」などの講義科目や「西洋史文献講読Ⅰ」などの科目を履修します。また「西洋史文献講読Ⅱ」は「西洋史文献講読Ⅰ」よりも高度な内容で、最新の英語文献を集中的に読み込みます。3回生次までに卒論関係の授業以外の単位をそろえるのが理想です。

3回生次からは自分のキャリアについて本格的に考える必要があります。夏休み中に行われるインターンシップは企業・自治体・学校などで実際に業務を体験するものですが、職業やキャリアについて理解を深め、自分自身のキャ

リア・イメージを具体化する上で刺激になりますから、積極的に参加して下さい。大学院進学希望者は学内で大学院説明会が春と秋に開催されますので、出席して下さい。

【4回生】

4回生では就職活動と卒論作成が車の両輪です。両立は大変ですが、いずれも4年間の大学生活の集大成とも言うべきものですから、悔いのないように全力で取り組んで下さい。1月末～2月上旬には卒業論文の試問があります。

また大学院進学希望者については9月に学内進学試験があり、9月（秋入試）と2月（春入試）には一般入試が実施されます。詳しくは大学院入試要項を参照して下さい。

西洋史履修モデル（古代・中世史）

科目区分	専攻専門科目			専攻専門科目以外
	必修科目	登録必修科目	必修 / 登録必修科目以外の科目	
一回生		国際文化入門講義 研究入門Ⅰ・Ⅱ リテラシー入門 西洋史概論Ⅰ・Ⅱ		英米文学概論Ⅰ（英米） 文化芸術概論（文芸） 哲学概論Ⅰ・Ⅱ（哲学）
二回生		基礎講読Ⅰ・Ⅱ 西洋史概論Ⅲ・Ⅳ 西洋史文献講読Ⅰ	西洋古代史研究 西洋中世史研究	キリスト教思想Ⅰ・Ⅱ（人文） ラテン語Ⅰ・Ⅱ（人文） 比較文化講義（文芸） グローバルヒストリー（文芸） イタリア文化講義Ⅰ・Ⅱ（文芸） ヨーロッパ文化史（文芸） フランス語圏の文学（文芸） 文化交流論（文芸） イタリア文化研究（文芸） 民族と芸術（文芸） 音楽と社会（文芸） パフォーマンスアート論（文芸） 宗教とイメージ（文芸）
三回生		専門演習Ⅰ・Ⅱ	西洋史文献講読Ⅱ 史料から見る西洋古代史 史料から見る西洋中世史 西洋史特殊講義	ギリシア語Ⅰ・Ⅱ（人文） 神話学Ⅰ・Ⅱ（人文） キリスト教文化史（文芸） 宗教と社会（教養）
四回生	専門演習Ⅲ・Ⅳ 卒業論文			

西洋史履修モデル（近代・現代史）

科目区分	専攻専門科目			専攻専門科目以外
	必修科目	登録必修科目	必修 / 登録必修科目以外の科目	
一回生		国際文化入門講義 研究入門Ⅰ・Ⅱ リテラシー入門 西洋史概論Ⅰ・Ⅱ		英米文学概論Ⅰ（英米） 文化芸術概論（文芸） メディアと現代文化（教養） 科学技術と倫理（教養） 映像と表現（教養）
二回生		基礎講読Ⅰ・Ⅱ 西洋史概論Ⅲ・Ⅳ 西洋史文献講読Ⅰ	西洋近代史研究 西洋現代史研究	社会学概論Ⅰ・Ⅱ（人文） グローバルヒストリー（文芸） 現代ヨーロッパ論（文芸） イタリア文化講義Ⅰ・Ⅱ（文芸） ヨーロッパ現代思想Ⅰ・Ⅱ（哲学） 西洋美術史（文芸） 比較文学論（文芸） 音楽と社会（文芸）
三回生		専門演習Ⅰ・Ⅱ	西洋史文献講読Ⅱ 史料から見る西洋近代史 史料から見る西洋現代史 西洋史特殊講義	ポストコロニアル文化論（文芸） ジェンダーと文化（文芸） 日米日欧関係史（国コミ） 英語圏文化論Ⅰ・Ⅱ（国コミ） 英語圏社会論（国コミ） 英語圏大衆文化論（国コミ） 多文化社会概論（国コミ） 国際移動論（国コミ） 国際環境論（国コミ） 現代の国際社会（国コミ）
四回生	専門演習Ⅲ・Ⅳ 卒業論文			

3 2回生からの専門科目概要

1回生（以上）配当科目

〔概論科目〕

【西洋史概論Ⅰ】（コア科目）

西洋の前近代（古代・中世）について、その時期の全体的な展望を持てるように概観することが目的の講義です。1回生秋学期配当の登録必修科目です。この講義を通じて、西洋の前近代に関する基本的な諸問題の知識を身につけるとともに、自分の関心が西洋史の中でどのような位置にあるかを知ることができます。また、狭い専門に閉じこもることなく、ゼミなどでさまざまなテーマに関心を持ち、発言する／できるようになるために必要な「基礎教養」となる講義です。

【西洋史概論Ⅱ】（コア科目）

西洋の近現代について、その時期の全体的な展望を持てるように概観することが目的の講義です。1回生秋学期配当の登録必修科目です。この講義を通じて、西洋の近現代に関する基本的な諸問題の知識を身につけるとともに、自分の関心が西洋史の中でどのような位置にあるかを知ることができます。また、狭い専門に閉じこもることなく、ゼミなどでさまざまなテーマに関心を持ち、発言する／できるようになるために必要な「基礎教養」となる講義です。

2 回生（以上） 配当科目

〔小集団科目〕

【基礎講読Ⅰ・Ⅱ】（コア科目）

卒論作成の基礎力を養うために基本文献を主体的に読み解く力を身につけます。最近の研究書のなかから選ばれた共通の日本語文献を批判的・体系的に読みます。優れた研究書を精読することによって、視点やテーマを構想するコツ、分析の仕方、資料の扱い方などを学び取ります。Ⅰが春学期、Ⅱが秋学期の開講です。

〔概論科目〕

【西洋史概論Ⅲ】（コア科目）

西洋の前近代（古代・中世）について、その時期の全体的な展望を持てるように概観することが目的の講義です。2 回生春学期配当の登録必修科目です。この講義を通じて、西洋の前近代に関する基本的な諸問題の知識を身につけるとともに、自分の関心が西洋史の中でどのような位置にあるかを知ることができます。また、狭い専門に閉じこもることなく、ゼミなどでさまざまなテーマに関心を持ち、発言する／できるようになるために必要な「基礎教養」となる講義です。

【西洋史概論Ⅳ】（コア科目）

西洋の近現代について、その時期の全体的な展望を持てるように概観することが目的の講義です。2 回生春学期配当の登録必修科目です。この講義を通じて、西洋の近現代に関する基本的な諸問題の知識を身につけるとともに、自分の関心が西洋史の中でどのような位置にあるかを知ることができます。また、狭い専門に閉じこもることなく、ゼミなどでさまざまなテーマに関心を持ち、発言する／できるようになるために必要な「基礎教養」となる講義です。

〔講読科目〕

【西洋史文献講読Ⅰ】

卒論を準備する上で洋書（特に英書）を読みこなせることが、十分な研究をするために必要です。西洋史文献講読Ⅰは、西洋史に関係する基本的な英語文献の読解を通じて、西洋史の学習・研究を行っていく上での基本的な能力、つまり外国語読解の力と議論の組み立て方の習得をめざす授業です。時間をかけて予習し、なるべく多くの量の文献を読破していくことが必要とされます。

〔講義科目〕

【西洋古代史研究】

西洋古代史研究は、近年さまざまな関心から研究が進められている西洋古代の歴史について、最新の研究成果に基づき理解を深めていく講義です。西洋史概論Ⅰ及びⅢよりも専門的な知識の習得に適した授業です。

【西洋中世史研究】

西洋中世史研究は、近年さまざまな関心から研究が進められている西洋中世の歴史について、最新の研究成果に基づき理解を深めていく講義です。西洋史概論Ⅰ及びⅢよりも専門的な知識の習得に適した授業です。

【西洋近代史研究】

西洋近代史研究は、近年さまざまな関心から研究が進められている西洋近代の歴史について、最新の研究成果に基づき理解を深めていく講義です。西洋史概論Ⅱ及びⅣよりも専門的な知識の習得に適した授業です。

【西洋現代史研究】

西洋現代史研究は、近年さまざまな関心から研究が進められている西洋現代の歴史について、最新の研究成果に基づき理解を深めていく講義です。西洋史概論Ⅱ及びⅣよりも専門的な知識の習得に適した授業です。

【史料から見る西洋古代史】

本講義では、西洋古代史で議論となっている論点に関して、関係資料などを駆使しながら多角的に分析を行い、最新の研究成果・手法を学びます。そのため本講義の受講にあたっては、西洋古代史に関する一定の知識・理解が必要とされます。

【史料から見る西洋中世史】

本講義では、西洋中世史で議論となっている論点に関して、関係資料などを駆使しながら多角的に分析を行い、最新の研究成果・手法を学びます。そのため本講義の受講にあたっては、西洋中世史に関する一定の知識・理解が必要とされます。

【史料から見る西洋近代史】

本講義では、西洋近代史で議論となっている論点に関して、関係資料などを駆使しながら多角的に分析を行い、最新の研究成果・手法を学びます。そのため本講義の受講にあたっては、西洋近代史に関する一定の知識・理解が必要とされます。

【史料から見る西洋現代史】

本講義では、西洋現代史で議論となっている論点に関して、関係資料などを駆使しながら多角的に分析を行い、最新の研究成果・手法を学びます。そのため本講義の受講にあたっては、西洋現代史に関する一定の知識・理解が必要とされます。

【特殊講義科目】**【西洋史特殊講義】**

本講義では、西洋史の学習・研究に必要な現代的な視点や方法論を習得・理解するために、さまざまなトピックスをテーマとしてとりあげて分析を行います。高校までの歴史の授業ではあまり取り上げられないことのないテーマも積極的に取り上げていきます。

3 回生（以上） 配当科目**【小集団科目】****【専門演習Ⅰ・Ⅱ】（コア科目）**

専門演習Ⅰ・Ⅱでは時代及び地域別のクラスに分かれ、卒論に向けてそれぞれの研究成果を何度か中間報告し、お互いに検討しあい、テーマ・理解を深めていきます。検討しなければならない具体的な課題を明確にし、資料調査を深めていきます。Ⅰが春学期、Ⅱが秋学期の開講です。

【講読科目】**【西洋史文献講読Ⅱ】**

西洋史文献講読Ⅱは、西洋史に関係する英語を中心とした外国語の専門的な文献、あるいは一次資料の読解を行い、西洋史研究の最前線に関する深い理解をめざす授業です。西洋史研究のために不可欠な方法論的・理論的な素養を身につけ、資料やテキストのより高度な批判的読解力を身につけることが求められます。

4 回生（以上） 配当科目**【小集団科目】****【専門演習Ⅲ・Ⅳ】（コア科目）**

専門演習Ⅲ・Ⅳでは卒論の執筆を前提において、全体構想や各部分の章の内容を発表し、論文としての構成・論理・実証性を備えたものになるように、ゼミで批評・コメントの交換を行います。Ⅲが春学期、Ⅳが秋学期の開講です。

〔卒業論文科目〕

【卒業論文】（コア科目）

卒業論文は4年間で学んだことの総仕上げです。そこには単に西洋史の歴史的な知識を披瀝するだけではなく、研究を通して培われたリテラシー能力、社会科学・歴史学的な発想と方法論、研究の社会的意義の考察を織り込まなければなりません。さらにその内容を体系的かつ説得力のある文章で表現することが重要です。

4 専門演習 I～IV

1回生から4回生まで、卒論作成という到達目標のために中心となる場が、演習（ゼミナール、略称ゼミ）です。演習はお互いの調査・研究の成果を発表・討論しあうことによって、相互に知見と認識を交換する学びの共同性の場です。そのなかで、自分一人の研究では実現できないような相互の発見と知的興奮を体験し、お互いを高めあうことができます。また、単純なことですが、演習での討論を通じて他人の語りに耳を傾け、それに応答するというコミュニケーションの基本、モラルを身につけてほしいと思います。

5 卒業論文

研究テーマは、3回生を終える前にはほぼ決定し、4回生の登録時に迷わないようにしておきましょう。新年度のはじめ頃にテーマを担当教員に報告し、具体的指導が受けられるように準備しておくことを望みます。卒業論文の作成・提出については小集団科目（専門演習）で配布される『西洋史学専攻卒業論文の葉』を読み、その指示にしたがうこと。

西洋史学専攻で選択できるテーマはもちろん数多くあります。しかし、そのテーマがほかのゼミ生にも関心が抱かれるようなものでなければなりません。そのテーマの歴史的な意味や社会的な重要性をよく考え、教員やゼミ生と相談する必要があります。たとえば、フランス革命を研究対象として選択した場合に、現在の社会においてこの革命を研究することはどのような意味があるのか、どのようなアプローチの仕方が適切であるのかをよく考えなければなりません。時代とともに社会が変われば、フランス革命を研究する意味も、アプローチの仕方も変わります。先人たちはどのような問題意識からフランス革命を研究してきたのか、その研究史を検討することによって、自分にとっての、あるいは現在の社会にとってのフランス革命研究の意味を考えてみてください。このような研究史を考えるうえで、伊藤貞夫、本村凌二編『西洋古代史研究入門』東京大学出版会1997年や、佐藤彰一、池上俊一、高山博編（増補改訂版）『西洋中世史研究入門』名古屋大学出版会2005年、望田幸男〔ほか〕編『西洋近現代史研究入門』名古屋大学出版会2006年、さらには『史学雑誌』の5月号が参考になります。

近年では、現代思想の新たな展開とともに、西洋史研究の方法論も大きく変わってきました。西洋史研究はほかの学問と孤立して存在しているわけではありません。したがって、卒論を作成するに当たって重要なことは、西洋史研究に隣接するほかの歴史学や社会科学の動向も見据え、そこから方法論を学び取ることです。

以上のような意味で卒業論文は、大学での研究の総仕上げです。総仕上げにふさわしい内容に出来上がることを切に願っています。

卒業論文審査の観点

1. 研究課題・テーマ（関心・意欲・思考・態度）
2. 先行研究・研究資料・註記（知識・理解・関心・態度）
3. 論文の展開（思考・判断・技能・態度）
4. 書式（表現・技能）

※卒業論文の評価の詳細については、シラバスで提出年度の『卒業論文』に記載されている説明を確認すること

6 専門科目一覧

教育目標

- ①現代世界の歴史的な成り立ちを理解するために、人文学の多様な方法論と思考を身につける。
- ②西欧・中東欧・ロシア・アメリカ、さらには植民地支配下の諸地域なども視野に入れて、世界史的な展望の中で「ヨーロッパ」を理解することができる。
- ③人文学的な知を用いて歴史書や史料を批判的に読み解くことができる。
- ④自分の調査・研究の成果を、口頭あるいは文章の形で表現することができる。
- ⑤歴史を学ぶことによって人間社会と文化の多様性や差異を認識し、他者に対する柔軟で謙虚な姿勢をとることができる。
- ⑥現代社会が抱える問題に対して、歴史が教えるところを参考に解決しようとする態度をもつ。

科目区分	科目名	配当回生	重複受講可能	コア科目	専攻学生のみ受講可	単位数	教育目標						履修方法
							①	②	③	④	⑤	⑥	
入門科目 (初年次科目)	国際文化入門講義	1回生のみ		※	※	2	○	○	○	○			登録必修
	*リテラシー入門	1回生のみ		※		2			○	○			登録必修
小集団科目	研究入門Ⅰ	1回生のみ		※	※	2	○	○	○	○			登録必修
	研究入門Ⅱ	1回生のみ		※	※	2	○	○	○	○			登録必修
	基礎講読Ⅰ	2回生のみ		※	※	2	○	○	○	○			登録必修
	基礎講読Ⅱ	2回生のみ		※	※	2	○	○	○	○			登録必修
	専門演習Ⅰ	3回生のみ	※	※		2		○	○	○	○	○	登録必修
	専門演習Ⅱ	3回生のみ	※	※		2		○	○	○	○	○	登録必修
	専門演習Ⅲ	4回生以上	※(注1)	※		2		○	○	○	○	○	4単位必修(注2)
専門演習Ⅳ	4回生以上	※(注1)	※		2		○	○	○	○	○	4単位必修(注2)	
卒業論文	卒業論文	4回生以上		※		4		○			○	○	必修
概論	西洋史概論Ⅰ	1回生以上		※		2	○	○					登録必修
	西洋史概論Ⅱ	1回生以上		※		2	○	○					登録必修
	西洋史概論Ⅲ	2回生以上		※		2	○	○					登録必修
	西洋史概論Ⅳ	2回生以上		※		2	○	○					登録必修
講読	西洋史文献講読Ⅰ	2回生以上	※	※		2			○		○		登録必修
	西洋史文献講読Ⅱ	3回生以上	※	※		2			○		○		
講義	西洋古代史研究	2回生以上				2		○			○	○	
	西洋中世史研究	2回生以上				2		○			○	○	
	西洋近代史研究	2回生以上				2		○			○	○	
	西洋現代史研究	2回生以上				2		○			○	○	
	史料から見る西洋古代史	2回生以上				2		○	○			○	
	史料から見る西洋中世史	2回生以上				2		○	○			○	
	史料から見る西洋近代史	2回生以上				2		○	○			○	
	史料から見る西洋現代史	2回生以上				2		○	○			○	
特殊講義	西洋史特殊講義	2回生以上	※			2	○				○	○	

1回生配当の「国際文化入門講義」・「研究入門Ⅰ・Ⅱ」は、学域に所属する学生のみ受講可能とします。

*・・・「リテラシー入門」は基礎科目です。

注1) 重複受講が可能となるのは、年度を超えて同一セメスターで履修する場合に限りです。

注2) 専門演習Ⅲ・Ⅳについては合計で4単位までしか履修できません。

7 履修方法

【必修科目】卒業するために必ず単位を修得しなければならない科目

科目区分	科目名	単位数	配当回生	履修方法
小集団科目	専門演習Ⅲ	2	4回生以上	※4単位必修
	ゼミナールⅢ	2		
	専門演習Ⅳ	2	4回生以上	
	ゼミナールⅣ	2		
卒業論文	卒業論文	4	4回生以上	4単位必修

※ただし、卒業論文を執筆する4回生ゼミに限る。

【登録必修科目】必ず登録・受講しなければならない科目

科目区分	科目名	単位数	配当回生	履修方法
入門科目 (初年次科目)	国際文化入門講義	2	1回生のみ	2単位
	リテラシー入門	2	1回生のみ	2単位
小集団科目	研究入門Ⅰ	2	1回生のみ	2単位
	研究入門Ⅱ	2	1回生のみ	2単位
	基礎講読Ⅰ	2	2回生のみ	2単位
	基礎講読Ⅱ	2	2回生のみ	2単位
	専門演習Ⅰ	2	3回生のみ	2単位
	専門演習Ⅱ	2	3回生のみ	2単位
概論	西洋史概論Ⅰ	2	1回生以上	2単位
	西洋史概論Ⅱ	2	1回生以上	2単位
	西洋史概論Ⅲ	2	2回生以上	2単位
	西洋史概論Ⅳ	2	2回生以上	2単位
講読	西洋史文献講読Ⅰ	2	2回生以上	2単位

8 その他

演習の手引き

小集団科目＝演習＝ゼミとは？

ゼミは論理的思考の訓練の場です。自分の考えていることは、どのような根拠に基づいているのでしょうか？そしてそのような根拠は、他人が見ても納得できるようなしっかりしたものなのでしょうか？クラスでの発表、ディスカッション等を通じてものを考える訓練をしてもらいます。それは、信頼に足る根拠に基づいた、論理を構築する訓練でもあるのです。

同時に、ゼミは、情報・データの収集、処理の訓練の場です。図書館で本や論文を探したり、それを読んで必要な箇所を探したり、ノートを取ったりして、様々なデータを自分のものにします。クラスでの勉強を通じて、価値ある情報をどのように探すのか、手に入れた情報をどのようにして評価するのか、そのような訓練をしてもらいます。

その集大成として、論文（ペーパー）などを書きます。ペーパーは、調べたことをそのまま要約してまとめるような、いわゆるレポートとは全く異なるものです。論文の詳細は後に述べますが、調べもの、思考、発想を総合的に表現するものです。

発表とは？

クラスの中で行う作業のうち、大きな比重を占めるのが発表です。基礎講読Ⅰ・Ⅱでは、毎回の授業で、全員が

読んでくるべきテキストの部分が決められています。分担を決めて、担当の人（またはグループ）はその週の内容について、テキストの範囲を超えて、事典や図書館の本でより詳しく調べ、まとめて発表することになります。発表は、基礎講読の授業の大きな要素です。第一に、評価の対象ですので、きっちりと担当の先生に自分の勉強をアピールする場です。これは説明の必要ないことでしょう。第二に、自分が「先生」になって、クラスメートに教える、情報を伝える訓練をする場でもあります。自分が調べたことを、どうしたらみんなに興味を持ってもらえるか、面白いと思ってもらえるか、理解してもらえるか、そのような気持ちを持って準備をすることがとても大切なのです。逆に、聞く側の立場に立った時も、仲間が発表しているのですから、できるだけ興味を持って聞いてあげる気持ちがあるといいですね。自分が発表している時に、寝たりされると哀しいものですよ。

読む・まとめる

本をどう読むのか、どうまとめるのか、については、いろいろ説明を読むよりも、実際にその作業をやってみて、もがき苦しみ、自分なりのコツをつかんでいくのが一番です。もちろん、本屋には様々な入門書がおいてあって、それぞれ、一般的な解説をしてくれています。とりあえずそのような入門書を読みたい人には、

・木下是雄『レポートの組み立て方』（ちくま学芸文庫、1994年）

をおすすめしておきます。スタンダードといえればスタンダードなのですが、かなり初歩的なものです。これだけでは不足ですから、

・鹿島茂『勝つための論文の書き方』文春新書 295（文藝春秋、2003年）

を是非読んでみてください。キワモノ本のようなタイトルですが、論文を書く以前の発想の段階、特にいかに「問い」を立てるかという点について真面目に論じています。「自由に論じなさい」と言われて困っている人は、手に取ってみることをお勧めします。

いずれにせよ、真剣に自分のトピックと取り組み、まとめる作業を行うと、その努力というのは自然と発表やプリントににじみ出るものです。逆に、いい加減な作業は、発表を聞いている先生やクラスメートにすぐばれてしまいます。自分の頭脳の能力の限界に挑戦するつもりで本を読んで、いろいろ考えてみてください。

レジュメ

大学用語で発表プリントのことを指します。発表の参考資料です。3つの要素が含まれている必要があります。第一は、皆さんがしゃべる内容の「アウトライン」です。プリントを見れば、この発表の内容は、こういうことで、この順番で話が進むのだな、ということが一目でわかる必要があります。つまり、皆さんの発表の内容が論理的に構成されていて、それを反映したプリントでなければなりません。第二は、「資料」としての内容です。皆さんの発表を理解するために役に立つような図表、歴史的資料、解説などを、重要な項目について挙げる必要があります。それも素っ気ない数項目だけのアウトラインと図表のコピーがはりつけてある、というのではなく、両者が密接に関連したレイアウトを工夫してください。皆さんの発表の「観客」であるクラスメートにとって、わかりやすくするための、そのようなプリントを目指しましょう。なお、発表で皆さんがしゃべる内容が一字一句書いてあるような、原稿そのものはレジュメにはなりません。第三は、「参考文献」リストです。発表をする上でお世話になった本や論文、事典類を正確に挙げてください。

発表の心得

クラスでは発表の時間が限られているので、与えられた時間の中でおさめることが必要です。自信のない人は、友人とリハーサルをして、感覚をつかむ練習をしてもいいでしょう。また、25～30人の人に聞いてもらうのですから、(1)大きな声でしゃべる、(2)前を見て、みんなと目を合わせながら発表する、(3)聞く人が楽しんでくれるようなサービス精神を持つ、ことが必要です。きまじめな人は、原稿を用意してきて、それを読み上げる人もいますが、それは望ましくありません。内容を頭に入れておいて口頭で説明する能力は、それ自体、皆さんに身につけてもらいたいものなのです。言い換えれば、発表は、パブリック・スピーチ、パフォーマンスの側面も持っています。近い将来、就職試験の面接を受けたり、会社で会議をしたりするときに、必ず必要とされる技術ですので、今から意識して練習するといいでしょう。

また、学期の限られたスケジュールの中で発表の分担を決めていますから、ドタキャンは厳禁です。寝坊や準備が間に合わなかったなどの理由は論外です！ 病気などでどうしても発表の日に来られないときは、できるだけ授業が始まる前までに担当教員に相談すること。何の連絡もない場合は、再発表の機会が与えられなくなる場合があります。レジュメの提出期限については、クラスによって方針が違いますので、教員の指示に従ってください。

論文とは？

発表の準備で行う作業と、論文作成で行う作業の間に本質的な違いはありません。ただ、論文はより厳密に、より徹底的に調査し、そしてそれを文章という形で表現する点において、より高度な作業だといっていいでしょう。論文の核は、「○○は××である。」という statement（日本語では主張とか結論とか命題とかいろいろな言い方をします）です。その statement を、歴史的事実、事件などを用いて証明、説明します。つまり、自分の statement の正しさを立証するものが論文なのです。ですから、論文は、必ず主張の形を取らなくてははいけません。ただ調べたことが羅列してあるだけでは論文とは呼べません。

Statement とは？

さて、その statement は、歴史学では「解釈 interpretation」「説 thesis」などと呼びます。これは、それ自体では意味をもたない膨大な歴史的事実の中に意味を見だし、歴史の叙述を作る作業の本質です。歴史的事実や事件（データと呼んでいいでしょう）はそのような叙述をする際の材料に過ぎません。

実は、大学で学ぶ学問というものは、分野は違っていても statement とデータの関係にそれほど大きな違いはありません。たとえば、物理や化学では「定理」と「実験データ」になったり、社会学では「理論」と「調査データ」になったりします。いずれにしても、それぞれの学問分野で扱う膨大なデータを単純化し、意味づけをし、我々が直感的に理解できるものにする。そのような「抽象化」の作業が学問の本質です。

理論は、そのようにして作られるものであって、それだけを暗記しても意味がありません。ましてやデータだけを覚えることは何の意味もありません。みなさんが大学で学ぶ最も重要なことの一つは、自らの手でデータと理論を両方扱い、(1) データから理論を構築する、(2) 理論から現実の事象を推測する、つまり、現実世界と抽象世界を往復する能力を養うことです。

もう少し具体的に考えてみましょう。1冊の本を分解してみましょう。ある本を読んだときに、ふーん、面白かった、で終わってしまっただけではいけません。著者が主張したかったのは「一言でいえば」何だったのか？これを必ず理解する必要があります。「一言でいえば」というところが大切です。何分もかかるようでは、皆さんの頭の中で、著者の提供した statement と data の区別ができていないのです。（くだらない本の場合は主張がない場合もありますよ。）著者の主張が理解できたら、今度は、その主張を展開するために、どのような議論を構築しているのか、考えてみます。Aを言うためにBを出し、Bを言うためにCを出し、というように議論はどんどん細部に入っていく、そして最終的に生のデータ（歴史学では史料と呼びます）に行き当たります。そうすると、しっかりとした史料的裏付けがあって初めてきちんとした歴史の statement が主張できる、ということになります。

トピックの選び方

論文で何を扱うかを決める時点で、論文の勝負は半分ぐらいついてしまいます。論文として良いトピックと良くない（くだらない、つまらない）トピックがあります。次の幾つかの点を考慮しながら決めて下さい。

- ・ 与えられた枚数の中で処理できるサイズのトピックであること。たとえば、20000字の論文で、古代から現代までの女性史を扱うことはできません。
- ・ 自分が自発的に興味を持てるトピックにすること。何となく選んでしまっただけで先が続かないことがよくあります。論文を書き進める原動力は自分の中にしか存在しないのです。
- ・ 資料を使って検証可能なトピックを選ぶこと。たとえば、「なぜお酒がこんなにおいしいのか」論文を書きたいとしても、歴史の資料を使って検証することができなければ、歴史の論文にはなりません。（生理学や医学では可能かもしれませんが・・・）
- ・ あまりに「無難」なトピックは避けること。もう既にわかっていることをテーマにしても面白くないですし、何の発見もありません。
- ・ 迷いすぎないこと。およそまともな人間なら、同じように興味を持てるトピックがいくつもあるはずですが、自分にとってこれが究極のトピックであるというようなものを求めてしまうと、逆に自信をなくしてしまいます。これから論文を書く機会はいくらでもあります。とりあえず決めてしまっただけで、進めるぐらいで十分です。
- ・ 質問の形でテーマ設定を試みること。たとえば、「産業革命について」論文を書くよりは、「なぜイギリスで産業革命が起こったのか？」とか、「産業革命を起こすのに必要な前提条件は何だろうか？」などの質問の形でテーマを考えてみましょう。それに対する皆さんの「答え」が、前述した statement になっていきます。

論文の構成

皆さんが書くことになる論文も、プロ（研究者）が書く学術論文も、基本的には同じものです。議論を構築するもっとも一般的な様式は次のようなものです。

はじめに	←自分の問題意識や関心、何を明らかにしようとするのか述べます。
第1章	←本論で議論を展開します。短い論文なら節で区切る必要はありません。
第2章	
・・・	←内容がどのぐらいに分かれるかは、皆さんの判断です。
第×章	←本論の終わり。
おわりに	←何をどう明らかにしたのか、そして今後の課題について述べます。
参考文献	

実際に書き始める前に、自分の材料をどのように配置して上のような構成を作るか、紙にフローチャートのような表を作ると書きやすくなります。また、そうすることで、結論を見失ってしまったり、書き出しと終わりで違うことを言ってしまうたりするのを防ぐことができます。

もうおわかりのことと思いますが、論文の結論 statement というのは、論文の最後にちょこっと付け足す感想めいたコメントでは全くないのです。（高校までの「レポート」では、ただの「感想」が結論として許されてきたと思いますが、大学では通用しません。）結論には、たしかに「結」という言葉がついていますし、論文の終わりではっきりとした形で要約はします。が、結論というのは論文全体で論証するものなのです。あるいは、先に述べたように、論文そのものなのです。

論文の体裁について

用紙

- ・ A 4 用紙に横書きでワープロ印刷します。紙は縦長の方向で使用します。
- ・ 用紙の左右の余白はそれぞれ 3 cm あけること。用紙の上下の余白は、それぞれ 5 cm あけること。欄外には、教員や TA がコメントを書き込むので、なるべく余白を大きくとった方が便利です。また、左部は綴じる部分の余裕が必要です。
- ・ ページ番号を各ページにつけること。位置は、用紙下端から 3 cm 程度の中央部分が標準的です。本文と同じ字体、大きさの算用数字を用います。カッコやハイフンで囲む必要はありません。
- ・ クラス内で提出するものについては、ページの左上をホッチキスで綴じること。事務室に提出するものは、専用の表紙を manaba+R よりダウンロードし、表紙に指定してある箇所をホッチキスで綴じること。
- ・ 教員に提出するものとは別に、自分用にもう 1 部印刷して持っておくと安心です。

文字

- ・ 原則として、横に 1 行あたり 40 字、縦に 25 行入れて、1 ページに 1000 字入るように設定すること。西洋史では、手書きで論文を提出することを認めません。
- ・ 日本語は明朝系の字体を用い、ゴシック系は文字の見出しなどにとどめること。同様に、欧文文字はセリフ系（Times, Century, Bookman 等）を本文に、サンセリフ系（Arial, Helvetica 等）を見出し用に使います。
- ・ 本文の大きさは 10.5 ～ 12 ポイント。

長さ

- ・ それぞれの科目で、教員によって指示された長さを守ること。基本的には本文部分の長さが指定されます。
- ・ 本文以外に、表紙や参考文献目録が必要です。

日本語

- ・ 内容の区切りに従って段落を分けること。各段落は書き出しを 1 字下げること。
- ・ 各段落の書き出しの文（センテンス）は、その段落の内容を要約するような内容にすること（トピック・センテンス）。トピック・センテンスについては、教室で説明を受けて下さい。
- ・ 研究者や歴史上の人物の名前は、敬称略、つまり呼び捨てが原則です。日本では、マスコミを含め、外国人を呼び捨てにして日本人には敬称を付けるという奇妙な習慣があるようです。研究者の中にも、外国人研究者を呼び捨てにして日本人研究者に「氏」や「先生」を付ける人がいます。皆さんはまねをしてはいけません。

- ・引用を途中省略するときは「○○○○○（中略）○○○○○」のように、省略箇所を明示します。
- ・常体（である体）で書くこと。この『教学の手引き』のような敬体（です体・ですます体）で書いてはいけません。

コンピュータ使用上の注意

1. とにかく保存

- ・コンピュータで作業する場合、保存はこまめにすること。書いている最中は、5分に1回、あるいは1段落を書くごとに、トイレに行くたびに、ぐらいの頻度で保存する習慣をつけること。
- ・Microsoft Word を含む大抵のワープロ・ソフトは「Ctrl + S」で保存できます。
- ・コンピュータ内蔵のハード・ディスクは必ず壊れます。USB メモリー等にバックアップをとること。3時間ごとに、ワープロ・ソフトを終了して、ハード・ディスク上の重要ファイルを USB メモリー等にコピーすること。この説明がわからない人はただちにパソコンの操作法の復習を。

2. 印刷も立派なバックアップ

- ・機械のトラブルで USB メモリー等が破壊されたり、書き込まれていなかったりすることがたまにあります。
- ・このような最悪の事態に備えて、紙に出しておくことも大切です。実際に仕事をしているという「証拠」にもなります。仕事を終了する前に、その日の成果を印刷すること。

3. それでも不測の事態に備えて

- ・用紙とインクのストックを確認すること。プリンターのインクが何枚ぐらい印刷できるのかあらかじめ調べ、多めに用意しておくこと。仕上げの印刷をしているうちにとんでもない間違いを見つけて全部印刷し直し、ということもよくあります。

共同研究室の利用について

1. 場 所 manaba+R を確認してください。
2. 利用時間 原則として 8:30 ~ 22:00 です。
なお、土日・祝日に利用する場合は、必ず事前に「文学部専攻施設等（夜間・休日・深夜）利用願」を提出し、許可を得るようにして下さい。
3. 利用方法 学生証がカードキーとなっています。自動的に施錠されますので、学生証を共同研究室内に置いたまま、外へ出さないよう注意して下さい。
4. 書籍について 共同研究室の書籍は共通の財産ですので、大切に扱いましょう。



文化芸術専攻

1 1 教学理念・教育目標

20世紀は人類世界に大きな変化をもたらしました。さらに9・11同時多発テロ事件をきっかけとして、かつて夢一杯に語られていた21世紀は、先行きの見えない不安にみちた揺れ動く世界になってしまいました。このような状況下で、既成の価値観や生き方に疑問が投げかけられるのは必然といえるでしょう。大学における学問のあり方の問い直しも、そうしたラディカルな問題のひとつです。

私たち文化芸術専攻は、すさまじい速度で流動し変化をとげていく世界がかかえる様々な問題に、これまでの学問の枠組みを超えて応えようとする領域です。そのため、「学際的」な立場からものごとにアプローチすることを目的としています。すなわち、さまざまな言語で綴られた物語・宗教信仰・ファッション・暴力といった人間の営み自体やそこで用いられる象徴・音楽・絵画・建築・マンガといった芸術による表象など、多様な文化の交渉や変容のあり方に対して、文化人類学、芸術学、社会学、歴史学、言語学、文学といった学問の中から、ある特定の専門分野を出発点におきながら、それとは別の分野の知見を取り入れ、より広く多様な視点からものごとを横断的にとらえ考察していこうという研究方法を重視します。そのようなアプローチを自らのものとするのは容易ではないかもしれませんが、しかし、自分が世界に向きあうために必要な「ユニークな批判的経験」や、従来の学問分野からは生まれてこなかった「新しい発見」といった、かけがえのない成果は、こうした取り組みの先に出会うことができるはずです。

2 2 履修の仕方と履修モデル

上記の教育目標を実現するために、また学生個人の関心と目的を活かすために文化芸術専攻の専門科目は、非常に幅広い分野にわたっています。それらをどのように選択して組み合わせるかということについては、後に履修モデルに即して説明しますので、ここではまず、全体の構成を示します。専攻の多様な学びの軸となるのは「基礎講読Ⅰ・Ⅱ」、「人文総合外書講読Ⅰ・Ⅱ」、「専門演習Ⅰ・Ⅱ」、「専門演習Ⅲ・Ⅳ」という回生別に設けられた登録必修となる小集団科目です。

2回生の「基礎講読Ⅰ・Ⅱ」では、多様なテキスト（文字で綴られたものとは限りません）を扱いながら、ひとりひとりの自主的・意欲的学習と、ディスカッションやプレゼンテーションといった共同学習・グループ研究を通じて、学際的な研究の基礎を学びます。これと並行して、2回生では、「人文総合外書講読Ⅰ・Ⅱ」が登録必修となっています。単なる外国語の習得のための授業ではなく、専門的な研究やそれに関連する資料を、原書で読み、原語で考える機会を得ることを主要な目的としています。考えるための素材を日本語の制約から解放し、外へ向けるための第一歩が、この「外書講読」なのです。この他、2回生では、専門的かつ多様な学びの出発点となるコア科目があります（次項の★印の科目です）。「西洋美術史」「日本・東洋美術史」「西洋音楽史」のうちのいずれか1つと、「文化交流論」および「比較文化講義」は、できるだけ2回生次に履修しておいて下さい。また、2回生では多様な副専攻も用意されています。これらを積極的に利用して、学際的な研究の幅を広げておいて下さい。

3回生では、「専門演習Ⅲ・Ⅳ」（ゼミ）において、個人発表を行い、ディスカッションやゼミ担当教員からの助言などを通じて、専門的な分析や考察を行う能力を養いつつ、卒論テーマの具体化および関連資料の収集や読解を進めていきます。3回生でも「人文総合外書講読Ⅲ・Ⅳ」が用意されていますので、ゼミでの研究分野と関連する言語を履修しておくといいでしょう。また講義科目も、「現代美術論」「ジェンダーと文化」「地域と移動」など、3回生次に推奨される専門科目も用意されていますので、積極的に利用しましょう。

次頁から、3種類の履修モデルを示します。各モデルの中の★印がつけられた「コア科目」は、先述のように、学びの出発点となる科目ですので、なるべく2回生のうちに受講しておいて下さい。これらは、あくまでモデルにすぎません。2つのモデルを組みあわせるような履修例もあり得るでしょう。自分の学びが実現できるよう、しっかりと履修計画をたてて下さい。

履修モデル 1. テーマ：言語表現と文化

ヨーロッパやそれ以外の地域の言語と文化を、文字に書かれたものやそうでないものも含めて、様々な角度から比較して分析し、現代人にとって言語表現とそれによる文化の意味を考える。

	必修科目	登録必修科目	文化芸術専攻科目	その他の科目
1 回生		研究入門Ⅰ・Ⅱ リテラシー入門 国際文化入門講義 文化芸術概論		英米文学概論Ⅰ（英米）
2 回生		基礎講読Ⅰ・Ⅱ 人文総合外書講読Ⅰ・Ⅱ	★比較文化講義 キリスト教文化史 現代ヨーロッパ論 ★文化交流論 社会言語学 言語の諸相 グローバルヒストリー (★はコア科目)	民俗学Ⅰ・Ⅱ（人文） キリスト教思想Ⅰ・Ⅱ（人文） 英米文学概論Ⅱ（英米） 西洋史概論Ⅲ・Ⅳ（西洋史） 神話学Ⅰ・Ⅱ（人文） 民間文芸学（人文） ラテン語Ⅰ・Ⅱ（人文） 宗教学（人文）
3 回生		専門演習Ⅰ・Ⅱ	人文総合外書講読Ⅲ・Ⅳ 比較文学論 フランス語圏の文学 ドイツ語圏の文学 ヨーロッパ文化史 宗教とイメージ 翻訳と文化	史料から見る西洋古代史（西洋史） 史料から見る西洋中世史（西洋史） 英文学史Ⅰ・Ⅱ（英米） 米文学史Ⅰ・Ⅱ（英米） 西洋史特殊講義（西洋史）
4 回生	専門演習Ⅲ・Ⅳ 卒業論文			

※ 3 回生以上での開講科目となる人文総合外書講読Ⅲ・Ⅳは、登録必修科目ではありませんが、ゼミでの研究を進めてゆく上で、外国語文献に触れるためのトレーニングともなりますので、受講登録を強く推奨します。

履修モデル2 テーマ：古今東西の芸術とそのアプローチ方法

古今東西の芸術表象を中心に、世界の歴史や文化、思想に関わる基礎的な知識を吸収してゆく。その中では、様々な芸術作品への研究・アプローチを可能とした「近代」の学問的背景も探ることとする。

	必修科目	登録必修科目	文化芸術専攻科目	その他の科目
1回生		研究入門Ⅰ・Ⅱ リテラシー入門 国際文化入門講義 文化芸術概論		美と芸術の論理（教養） 映像と表現（教養） 哲学と人間（教養） ヨーロッパの歴史（教養） 西洋史概論Ⅰ・Ⅱ（国際文化学域）
2回生		基礎講読Ⅰ・Ⅱ 人文総合外書講読Ⅰ・Ⅱ	★西洋美術史 ★日本・東洋美術史 ★西洋音楽史 現代美術論 音楽と社会 仏教と美術 文化芸術特殊講義 ★比較文化講義 ヨーロッパ文化史 ★文化交流論 グローバルヒストリー (★はコア科目)	西洋史概論Ⅲ・Ⅳ（西洋史） 哲学史Ⅰ～Ⅵ（哲学・倫理学） 世界の考古学・文化遺産 （考古学・文化遺産）
3回生		専門演習Ⅰ・Ⅱ	人文総合外書講読Ⅲ・Ⅳ ヨーロッパの建築・デザイン 民族と芸術 表象とメディア パフォーマンス・アーツ論 キリスト教文化史 現代ヨーロッパ論 宗教とイメージ ジェンダーと文化 テクノロジーと文化変容 翻訳と文化	京都学特殊講義Ⅳ（京都学）
4回生	専門演習Ⅲ・Ⅳ 卒業論文			

※3回生以上での開講科目となる人文総合外書講読Ⅲ・Ⅳは、登録必修科目ではありませんが、ゼミでの研究を進めてゆく上で、外国語文献に触れるためのトレーニングともなりますので、受講登録を強く推奨します。

履修モデル3 テーマ：交通と他者認識

近代以降の歴史のなかで生じた世界の様々な地域における文化の生成と交流、衝突の様態を比較し、社会学、文化人類学などの手法を通じて分析する。その際、テキストやイメージといった具体的対象物を土台におきながら、我々にとって異文化とは何か、他者とはいかなる意味をもつのか検討する。

	必修科目	登録必修科目	文化芸術専攻科目	その他の科目
1回生		研究入門Ⅰ・Ⅱ リテラシー入門 国際文化入門講義 文化芸術概論		文化人類学入門（教養） 社会学入門（教養） 歴史観の形成（教養） イスラーム世界の多様性（教養） ジェンダー論（教養） 美と芸術の論理（教養） 国際化と法（教養） 現代の世界経済（教養） 科学と技術の歴史（教養） 科学・技術と社会（教養）
2回生		基礎講読Ⅰ・Ⅱ 人文総合外書講読Ⅰ・Ⅱ	★文化交流論 ★比較文化講義 社会言語学 グローバルヒストリー 文化人類学 音楽と社会 (★はコア科目)	社会学概論Ⅰ（人文） 社会学概論Ⅱ（人文） 言語学概論（言コミ） 西洋史概論Ⅲ（西洋史） 西洋史概論Ⅳ（西洋史） 異文化間コミュニケーション（言コミ） 史学論Ⅰ（人文） 史学論Ⅱ（人文） 神話学Ⅰ（人文） 神話学Ⅱ（人文） 民俗学Ⅰ（人文） 民俗学Ⅱ（人文） 宗教学（人文）
3回生		専門演習Ⅰ・Ⅱ	人文総合外書講読Ⅲ・Ⅳ 翻訳と文化 ポストコロニアル文化論 表象とメディア 地域と移動 民族と芸術 宗教とイメージ テクノロジーと文化変容 ジェンダーと文化 パフォーマンス・アーツ論 比較文学論	国際移動論（国コミ） 国際環境論（国コミ） 西洋近代史研究（西洋史） 西洋現代史研究（西洋史） 史料から見る西洋近代史（西洋史） 史料から見る西洋現代史（西洋史）
4回生	専門演習Ⅲ・Ⅳ 卒業論文			

※3回生以上での開講科目となる人文総合外書講読Ⅲ・Ⅳは、登録必修科目ではありませんが、ゼミでの研究を進めてゆく上で、外国語文献に触れるためのトレーニングともなりますので、受講登録を強く推奨します。

3 2 回生からの専門科目概要

1 回生（以上） 配当科目

〔概論科目〕

★「文化芸術概論」（コア科目・登録必修科目）

文化芸術専攻は様々な学問分野の教員から構成されています。2回生からの専攻の学びでは、そうした複数の学問分野を身につけながら、それらを組み合わせて、多様な問題にアプローチしていくトレーニングを積むこととなります。その紹介編として、この文化芸術概論は3人の異なった学問分野の教員によるリレー方式を取り、文化芸術専攻が扱う学問分野および問題に対し、どのようにして多様なアプローチが可能となるのか、その方法の一端を明らかにしていきます。

〔小集団科目〕

★「基礎講読Ⅰ・Ⅱ」（コア科目・登録必修科目）

選択方法と登録方法については、1回生の秋学期に説明会が開かれますので、必ず出席するようにして下さい。

〔講義科目〕

「キリスト教文化史」

キリスト教にかかわる文化、芸術を、それをはぐくんだ社会や時代との関連で分析し、論じます。

2 回生（以上） 配当科目

〔講義科目〕

★「比較文化講義」（コア科目）

文化比較によって、各文化の共通点と相違点をさぐり、とくに各文化における死と再生の問題、不死の観念などについて講義します。

「現代ヨーロッパ論」

現代のヨーロッパ、あるいはヨーロッパの特定の国にかかわる文化、芸術、社会などを多様な視点から分析し、論じます。

「説話文学論」

ヨーロッパや日本、およびその他の地域の説話に関して日本語で読み、様々な考察を加えます。説話には、過去の文化的背景や当時の社会にたいする辛辣な批判となっているものもあります。こうした当時の時代背景もあわせて考察します。

「比較文学論」

一つの文学作品は、その作家独自の構想力だけでは成立しません。他の作品との系譜上の繋がりや同時代の作品との相関関係、成立時の時代背景からの影響など、ある作品を取り巻く種々の状況を視野に入れながら作品を読み解いていきます。

★「日本・東洋美術史」（コア科目）

西アジア、インド、東南アジア、中国および日本といったアジアの諸文化圏とその周辺地域における美術の諸相を時間軸に沿って把握した上で、造形表象の影響関係について、立体的な把握を目指します。また、身近な京都の美術作例もとりあげつつ、文化交渉のあり方を考えます。

「仏教と美術」

仏教の故地インドから日本に至るまでの、彫刻・絵画・建築といった様々な造形作品をとりあげつつ、造形の魅力や時代・地域的特色、籠められた宗教的意味についての理解などを通じ、仏教美術の全体像に迫ります。

★「西洋美術史」(コア科目)

西洋美術を通史的に概観します。扱う範囲は原始、古代から近現代に至るまで広範囲におよびますが、講義の起点にして重心となるのは、その時代のクラシック(古典)の再定義が美術史学を成立させることとなったルネサンス美術であり、そこから大胆に古今を往還し、多様な表現の意義を探ります。

「ヨーロッパの建築・デザイン」

ヨーロッパの建築および様々なデザインについて、芸術作品としての時代的・地域的意義や機能、役割について、様々な視点を導入しながら学びます。

★「西洋音楽史」(コア科目)

西洋音楽史を古代から現代まで広く扱う、音楽史および音楽学の入門的な講義です。その中で交響曲やオペラといったクラシック音楽の基本的なジャンルを理解するとともに、有名作曲家の音楽を知り、音楽の技法の歴史を通して、音楽がどのような構造で作られているのかを考えます。

「ポストコロニアル文化論」

現代文化をとらえるにあたって、その根底的な問題群を構成する帝国主義・植民地主義・人種主義がもたらす影響とそれらの諸力への批判の可能性をさぐります。とりあげるテーマに沿って、歴史学・文化人類学・社会学・文化研究・経済理論・政治思想・哲学・文学批評・音楽研究・生態学と領域横断的に問題を設定していきます。

「グローバルヒストリー」

なぜ世界はこのようであるのか、世界はどのように統合されてきたのか、そしていつ、どこでこうした変化は生じたのか、という問題について批判的視点を提供します。グローバル化、植民化、技術化、文明化、軍事化、ジェンダー分化などのプロセスに焦点をあて、関連する諸問題を考察します。

「宗教とイメージ」

本講義では宗教現象をその直接的な表出(儀礼や神話など)からではなく、そうした表出の表象、一般的にいえば「宗教美術」と呼ばれるものから捉え直し、そこからいかに社会全体に肉薄できるのか、その回路を探ります。

「テクノロジーと文化変容」

現代に至るまでのテクノロジーが近代化や開発に伴ってどう応用され、移転され、文化を変容させてきたのかという点について理解を深めます。テクノロジーがもたらした文化と社会の変貌と方向性を探り、その将来の姿について認識を深めます。

「言語の諸相」

英語の周辺にある諸言語を概観します。とくに英語の属しているゲルマン語系のオランダ語、スウェーデン語、ドイツ語またその歴史的な一局面としての古代の英語や中世のオランダ語などを解説し、言語への関心と理解を深めることを目的とします。

「社会言語学」

言語と社会の関わりを探り、人々の言語活動と社会状況がどのように関係しているのかを微視的また巨視的なレベルで考察します。

「民族と芸術」

多様な芸術が、それを「見る」あるいは「使用する」人々の文化や社会のなかにどう位置づけられるのかを考えます。また作例の考察を通じて、その際に語られている「民族」という定義や位置づけについての検証も行います。

★「文化交流論」(コア科目)

主として20世紀以降の、日本を含む太平洋の島々における異文化間の交流を、異なる立場からとらえなおします。

オセアニア、アジア、アメリカ、ヨーロッパの文化の多様な影響関係を、図像、映像、音声、言語、モノからなる様々なテキストから読み解きます。

「ジェンダーと文化」

それぞれの文化には、しばしばジェンダーにある特定の役割が与えられています。本講義では、それら文化が規定するジェンダーの役割を考察し、文化及び社会生活での男女の役割について知識を得ます。

「地域と移動」

地域を越えた人間の移動は人間の誕生とともに発生した現象ですが、近代という時代はその速度と量、方向性を著しく変化させ、地域自体の再編すら引き起こしています。本講義では主として近代以降における人間の移動が引き起こした様々な現象を多面的な視点から検討し、旅する存在としての人間について考察します。

「音楽と社会」

音楽を一つの文化現象と捉え、それをより広い視野から捉えることを試みます。社会的な事象と音楽現象を重ね合わせて分析する内容が主となりますが、必要に応じてポピュラー音楽なども対象としながら、政治やナショナリズム、階級、ジェンダーなどと関わって、人々が音楽というものをどのように意味づけてきたかを検証します。

「現代美術論」

芸術の表現がきわめて多様化した現代を考察します。まず前半で概説的〈知〉を提供したあと、後半では専門的なテキストを読みつつ批評史の観点を獲得する方法を学ばなかで、美術作品とそれを支える理論的枠組みについて、理解を深めます。

「表象とメディア」

絵画や彫刻、音楽といった諸芸術と情報伝達の機構であるメディア、さらにそこにおいて産出される文化表象との関わりを歴史的に理解し、また現代的な問題として考察します。

「ヨーロッパ文化史」

ヨーロッパにおける社会と人間の間接関係を通じて、その文化の成立の経緯と背景を明らかにします。

「フランス語圏の文学」

フランス語を公用語とするフランス、ベルギー、スイス、ケベックなど、世界の様々な国・地域でフランス語によって書かれた文学を、文化や政治、社会との関係を踏まえながら歴史的に考察します。

「ドイツ語圏の文学」

ドイツ語を公用語とするドイツ、スイス、オーストリアをはじめ、世界の様々な国や地域においてドイツ語によって書かれた文学を、文化や政治、社会との関係を踏まえながら歴史的に考察します。

「パフォーミングアーツ論」

パフォーミングアーツについて、その歴史を辿りつつ、演劇、オペラ、舞踊、ミュージカルといったジャンルの特徴とその成立背景、社会的意味を概説します。それらを考察するための視点として、特に、創る・再現する・参加する・観る・支えるといった様々な立場を意識しながら、現代社会におけるパフォーミングアーツにはどのような機能があるかを検討します。

「文化人類学」

教養科目「文化人類学入門」の発展的な講義です。現代社会の多様性を理解し、ミクロな視点からグローバルな問題を考え抜く知的技法として文化人類学を位置づけ、そこから現代世界が抱える様々な問題について検討します。

〔翻訳と文化〕

人間集団の文化に関する記述とは、文字だけではなく、映像記録を含め、つねに他者との対話を前提として生産されるものであり、そこにはつねに「翻訳」という能動的な生産の動きが働いています。本講義では、多様なテキストにみられる文化翻訳の問題について検討します。

〔特殊講義科目〕

〔文化芸術特殊講義〕

文化芸術の諸問題のうち、問題点や範囲を絞り込み、深く掘り下げて講義をします。

〔講読科目〕

〔人文総合外書講読Ⅰ・Ⅱ〕(2科目4単位以上登録必修)

イタリア語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、英語の各クラスから選択します。語学力の養成に重点を置きながら、海外での研究業績および資料を、その言語で読み、考える機会を設けるために行います。

〔エリアスタディイタリア科目〕

〔イタリアの文化とエクスプレッションⅠ・Ⅱ〕

イタリア語による会話と作文を中心にした授業で、高度なイタリア語の運用能力の獲得を目指します。

〔イタリアの文化とコミュニケーションⅠ・Ⅱ〕

イタリア語による会話を中心にした授業を行うことで、高度なイタリア語の運用能力の獲得を目指します。

〔イタリア文化研究〕

イタリアのある特定分野の文化を研究する際の、ものの見方や方法を学び、自分の研究を進めることに役立てます。

〔イタリア文化講義Ⅰ・Ⅱ〕

イタリアの文化、歴史、社会などを論ずることで、イタリア文化に関する知見を広めます。

3回生(以上) 配当科目

〔講読科目〕

〔人文総合外書講読Ⅲ・Ⅳ〕

イタリア語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語、英語の各クラスから選択します。考えるための素材を日本語の制約から解放し、外へ向かって関心を広げ、より深い講読を目指します。こうした中で、ゼミ研究でも必要とされる「批判的な読解能力」を養います。

〔エリアスタディイタリア科目〕

〔イタリアの文化とエクスプレッションⅢ・Ⅳ〕

イタリア語による会話と作文を中心にした授業で、高度なイタリア語の運用能力の獲得を目指します。

〔イタリアの文化とコミュニケーションⅢ・Ⅳ〕

イタリア語による会話を中心にした授業を行うことで、高度なイタリア語の運用能力の獲得を目指します。

3回生配当科目

4回生(以上) 配当科目

〔小集団科目〕

★「専門演習Ⅰ・Ⅱ」(コア科目・登録必修科目)・★「専門演習Ⅲ・Ⅳ」(コア科目・必修科目)

3, 4回生の合同ゼミ形式(一部、例外として3, 4回生でクラスが別個のゼミもあります)で、卒業論文としてまとめることを目標に、各自の課題を探求・研究していきます。多様な問題意識に応えつつ、3, 4回生において問題を絞ると同時に、学際性を追求するという目標を実現するため、複数の演習への登録も認められています。(ただし、

時間割編成や、小集団教育を確保するためゼミ受入人数の限界もありますので、可能な組み合わせは限られます。また、主たるゼミは3回生進級時に確定しておく必要があります。詳しくは、2回生秋学期に行われる次年度ゼミ選択のための説明会でアナウンスされます。

4 回生（以上）配当科目

〔卒業論文科目〕

★「卒業論文」（コア科目・必修科目）

下記の該当項目を参照してください。

4 専門演習 I ～IV

「専門演習 I ～IV」は3、4回生合同によるゼミ形式で、卒業論文にまとめることを目標として各自の問題を展開していきます。多様な問題意識に応えつつ、3、4回生において関心を絞ると同時に総合性・学際性を追求するという目標を実現するため、複数の演習への登録が認められます。したがって意欲ある学生は自分のテーマを複数の教員の指導で、複数の視点から深めることが可能になります。演習は各領域の担当者ばかりでなく、可能な範囲で文化芸術専攻以外の担当者にも開設してもらい、多様性をもたせるよう工夫されています。したがって、自分の志向する学問領域の担当者のみ限定せず、枠を広くとってよく考えて選択してください。

1、2回生の間に、様々な機会を通じてどの教員の演習を選択するのが自分の関心にとってもっとも適切か、また一つの研究分野に限定せずに演習を選択するとすれば、どのような組み合わせでとるべきか、よく考えて2回生の1月に提出する専門演習登録申請に備えてください。より詳細な説明は次年度ゼミ選択のための説明会の時に行います。

5 卒業論文

小集団教育を軸とした自主的学習の総仕上げとして卒業論文があります。論文作成に必要な文献や資料などを適切に収集して取捨選択し、それを応用できる能力を実践的に高めていきます。具体的には、4年間の学問的研鑽の集大成として、自己の研究の成果を論文のかたちで表現できる能力、その際の適切な文章表現能力、的確に口頭でも自己の意見を表現できる能力などを養います。

詳細については、このあとに掲載している「卒業論文の栞」を参照してください。

卒業論文審査の観点

1. 研究課題・テーマ（関心・意欲・思考・態度）
2. 研究資料・題材・先行研究（知識・理解・関心・態度）
3. 論文の展開（思考・判断・技能・態度）
4. 書式（表現・技能）

※卒業論文の評価の詳細については、提出する年度の『卒業論文』のシラバスを確認すること

6 専門科目一覧

教育目標

- ①文化芸術の諸分野の基礎をなす知識を有し、他の人文学的知と連携させることができる。
- ②文化芸術の諸分野における高度に専門的な知識を有し、社会に貢献できる。
- ③専門的なテキストや資料を批判的に読解する能力を有する。
- ④言語や資料によった高度な表現力・専門的コミュニケーション能力を有する。
- ⑤専門的知識をもって社会に参画しようとする意欲・行動力に富む。
- ⑥伝統・文化を発展的に継承しようとする責任感を有する。

科目区分	科目名	配当回生	重複受講可能	コア科目	専攻学生のみ受講可	単位数	教育目標						履修方法
							①	②	③	④	⑤	⑥	
入門科目 (初年次科目)	国際文化入門講義	1回生のみ		※	※	2	○					○	登録必修
	*リテラシー入門	1回生のみ		※		2	○					○	登録必修
小集団科目	研究入門Ⅰ	1回生のみ		※	※	2	○					○	登録必修
	研究入門Ⅱ	1回生のみ		※	※	2	○					○	登録必修
	基礎講読Ⅰ	2回生のみ		※	※	2	○			○	○	○	登録必修
	基礎講読Ⅱ	2回生のみ		※	※	2	○			○	○	○	登録必修
	専門演習Ⅰ	3回生のみ	※	※		2	○	○	○	○	○	○	登録必修
	専門演習Ⅱ	3回生のみ	※	※		2	○	○	○	○	○	○	登録必修
	専門演習Ⅲ	4回生以上	※(注1)	※		2	○	○	○	○	○	○	4単位必修(注2)
専門演習Ⅳ	4回生以上	※(注1)	※		2	○	○	○	○	○	○		
卒業論文	卒業論文	4回生以上		※		4		○	○	○	○		必修
概論	文化芸術概論	1回生以上		※		2	○					○	登録必修
講義	キリスト教文化史	1回生以上				2		○		○	○		
	比較文化講義	2回生以上		※		2	○	○		○	○	○	
	現代ヨーロッパ論	2回生以上				2		○	○		○	○	
	説話文学論	2回生以上				2		○		○	○		
	比較文学論	2回生以上				2	○	○		○	○		
	日本・東洋美術史	2回生以上		※		2	○	○	○		○	○	
	仏教と美術	2回生以上				2		○	○		○	○	
	西洋美術史	2回生以上		※		2	○	○	○		○		
	ヨーロッパの建築・デザイン	2回生以上				2		○	○		○		
	西洋音楽史	2回生以上		※		2	○	○		○	○		
	ポストコロニアル文化論	2回生以上				2		○				○	
	グローバルヒストリー	2回生以上				2	○	○	○		○	○	
	宗教とイメージ	2回生以上				2		○	○		○	○	
	テクノロジーと文化変容	2回生以上				2		○	○		○	○	
	言語の諸相	2回生以上				2		○	○		○	○	
	社会言語学	2回生以上				2		○	○		○	○	
	民族と芸術	2回生以上				2		○	○		○	○	
	文化交流論	2回生以上			※	2	○	○	○		○	○	
	ジェンダーと文化	2回生以上				2		○	○		○	○	
	地域と移動	2回生以上				2		○	○		○		
	音楽と社会	2回生以上				2		○		○	○		
	現代美術論	2回生以上				2		○		○	○		
	表象とメディア	2回生以上				2		○		○	○		
	ヨーロッパ文化史	2回生以上				2		○		○	○		
	フランス語圏の文学	2回生以上				2		○		○	○		
	ドイツ語圏の文学	2回生以上				2		○		○	○		

科目区分	科目名	配当回生	重複受講 可能	コア 科目	専攻 学生の 受講可	単 位 数	教育目標						履修方法
							①	②	③	④	⑤	⑥	
	パフォーマンスアート論	2回生以上				2		○		○	○		
	文化人類学	2回生以上				2		○		○	○		
	翻訳と文化	2回生以上				2		○		○	○		
特殊講義	文化芸術特殊講義	2回生以上	※			2		○	○		○		
講読	人文総合外書講読Ⅰ	2回生以上	※			2	○		○		○		2単位以上登録必修
	人文総合外書講読Ⅱ	2回生以上	※			2	○		○		○		2単位以上登録必修
	人文総合外書講読Ⅲ	3回生以上	※			2	○	○	○	○			
	人文総合外書講読Ⅳ	3回生以上	※			2	○	○	○	○			
エリアスタ ディ イタリア	イタリアの文化とエクスペッションⅠ	2回生以上				2	○	○		○		○	
	イタリアの文化とエクスペッションⅡ	2回生以上				2	○	○		○		○	
	イタリアの文化とエクスペッションⅢ	3回生以上				2	○	○		○		○	
	イタリアの文化とエクスペッションⅣ	3回生以上				2	○	○		○		○	
	イタリアの文化とコミュニケーションⅠ	2回生以上				2	○	○		○		○	
	イタリアの文化とコミュニケーションⅡ	2回生以上				2	○	○		○		○	
	イタリアの文化とコミュニケーションⅢ	3回生以上				2	○	○		○		○	
	イタリアの文化とコミュニケーションⅣ	3回生以上				2	○	○		○		○	
	イタリア文化研究	2回生以上				2	○	○	○		○		
	イタリア文化講義Ⅰ	2回生以上				2	○	○	○		○		
イタリア文化講義Ⅱ	2回生以上				2	○	○	○		○			

1回生配当の「国際文化入門講義」・「研究入門Ⅰ・Ⅱ」は、学域に所属する学生のみ受講可能とします。

*・・・「リテラシー入門」は基礎科目です。

注1) 重複受講が可能となるのは、年度を超えて同一 Semester で履修する場合に限りです。

注2) 専門演習Ⅲ・Ⅳについては合計で4単位までしか履修できません。

7 履修方法

【必修科目】卒業するために必ず単位を修得しなければならない科目

科目区分	科目名	単位数	配当回生	履修方法
小集団科目	専門演習Ⅲ	2	4回生以上	※4単位必修
	ゼミナールⅢ	2		
	専門演習Ⅳ	2	4回生以上	
	ゼミナールⅣ	2		
卒業論文	卒業論文	4	4回生以上	4単位必修

※ただし、卒業論文を執筆する4回生ゼミに限る。

【登録必修科目】必ず登録・受講しなければならない科目

科目区分	科目名	単位数	配当回生	履修方法
入門科目 (初年次科目)	国際文化入門講義	2	1回生のみ	2単位
	リテラシー入門	2	1回生のみ	2単位
小集団科目	研究入門Ⅰ	2	1回生のみ	2単位
	研究入門Ⅱ	2	1回生のみ	2単位
	基礎講読Ⅰ	2	2回生のみ	2単位
	基礎講読Ⅱ	2	2回生のみ	2単位
	専門演習Ⅰ	2	3回生のみ	2単位
	専門演習Ⅱ	2	3回生のみ	2単位
概論	文化芸術概論	2	1回生以上	2単位
講読	人文総合外書講読Ⅰ	2	2回生以上	2単位以上
	人文総合外書講読Ⅱ	2	2回生以上	2単位以上

8 その他

共同研究室の利用について

- 場所 manaba+Rを確認してください。
- 利用時間 原則として8:30～22:00です。
なお、土日・祝日に利用する場合は、必ず事前に「文学部専攻施設等（夜間・休日・深夜）利用願」を提出し、許可を得るようにして下さい。
- 利用方法 学生証がカードキーとなっています。自動的に施錠されますので、学生証を共同研究室内に置いたまま、外へ出さないよう注意して下さい。
- 書籍について 共同研究室の書籍は共通の財産ですので、大切に扱いましょう。

卒 業 論 文 の 栞

文化芸術専攻「卒業論文」の体裁について

原稿用紙に手書きする場合	A 4判「立命館大学論文用紙」(縦長)
縦書・横書の指定	横書
枚数	400字原稿用紙換算で30枚以上、50枚程度を目途とする。上限はもうけない。
その他の注意	黒または青のペンを使用すること。
ワープロを使う場合	A 4判白紙 (縦長)
縦書・横書の指定	横書
文字数に関する指定	1行あたりの文字数・1頁あたりの行数：ゼミ指導教員の指示に従うこと。
枚数等に関する指定	400字原稿用紙換算で30枚以上、50枚程度を目途とする。上限はもうけない。
その他の注意	上下左右のマージンが2～3cm 1頁あたりの文字数が1,200～1,400字 文字は10または10.5ポイント程度の大ききで、明朝などの一般的フォントを使うこと。
表紙等に関する体裁	ゼミ指導教員の指示に従うこと。
大きさ	A 4
綴じ辺	短辺綴じ(上辺綴じ)もしくは長辺綴じ(左辺綴じ)
題日用紙	manaba+Rよりダウンロードし、記入の上、表紙に貼付すること。
審査教員用紙	manaba+Rよりダウンロードし、記入の上、表紙の裏に貼付すること。
部 数	3部作成し、2部を提出する。(1部は本人手元保存)

卒業論文提出までの手続きについては提出する年度の履修・登録の手引きの「卒業論文の提出について」を参照して下さい。

卒業論文の提出について

目 次

- 1 体裁と手続き——最低限これだけはクリアしないと受理されません。
 - 1-1 用紙／書式／字数の制限
 - 1-2 構成——内表紙、要約、目次、本文、註、参考文献、図表・資料
 - 1-3 綴じ方（ファイル、おもて表紙の表記、etc.）
 - 1-4 題目の届け出
 - 1-5 提出
 - 1-6 口頭試問
- コラム——「共同研究室より」

2 文献表記のきまり——もう少しカタチにこだわってみる。

3 卒業論文を書く意味

1 体裁と手続き——最低限これだけはクリアしないと受理されません。

この栞〔しおり〕は、卒業論文を執筆・提出しようとする文化芸術専攻のゼミ受講生のために、初歩的かつ不可欠な形式的条件を中心に整理した手引きです。

この第1節ではまず、「体裁」と「手続き」について説明します。

使用する用紙・書式・構成などに係る指定や、題目の届け出と最終提出に係る手続きは、これだけはクリアしないと卒業論文として受領されない必要最低条件ですから、いずれについても遺漏のないよう心がけてください。（体裁については、共同研究室にサンプルが用意されていますので、それを参考にしてください。）

1-1 用紙／書式／字数の制限

1-1-1 用紙

A 4版の用紙の片面のみ、縦位置、横書きでを使用することを基本とします。

論文のテーマが縦書きを要請する場合は、個別に指導教員の指導を受けてください。

1-1-2 書式

細かな書式は、手書きの場合（1-1-2-1）と、ワープロを使用する場合（1-1-2-2）で、以下のように異なりますが、いずれの場合も、各頁の下部に頁番号（全体中の一連番号）を付さねばなりません。

1-1-2-1 原稿用紙を使用する場合

400字詰め立命館大学論文用紙（生協で取り扱っている）に、黒もしくは青のペンをもちいて清書します。（鉛筆書きの場合は濃い字で書いたものの鮮明なコピーしか認められません。）

1-1-2-2 ワープロ・ソフトを使用する場合

上下左右ともに2～3cmの余白をとります。字の大きさは10あるいは10.5ポイント程度、フォントは（特別な理由がないかぎり）明朝などの一般的なものがのぞましいでしょう。これで1行の字数は35字～40字、頁の行数を30行程度とすれば、1枚あたりの字数が1000～1200字程度となります。

なお、感熱紙は変色のおそれがあるので、コピーをとったものを提出してください。

1-1-3 字数の制限

本文（注を含まない）の分量については、400字詰め原稿用紙換算で30枚以上という下限と、50枚程度という緩やかな上限を設けています。

ワープロを使用する場合も、400字詰め原稿用紙に換算してその字数制限を守る必要があります。それが守られていることの目安として、本文末に以下の記載を加えるようにしてください——すなわち、字数のカウントが可能なワープロ・ソフトの場合はその表示された字数を、カウント機能のないワープロ

ロ・ソフトの場合は「1行の字数×行数＝空白も含めた合計字数」の計算式を、それぞれ最終行のカッコ（ ）内に記します。

なお、上限を超える量の執筆が見込まれるようなら、個別かつ事前に指導教員に相談してください。

1-2 構成

ファイルとして綴じられた論文（綴じ方は次項 [1-3] を参照）の中味は、

内表紙
要約
目次
本文
註
参考文献
付録・資料等

の順で構成されます。（後述しますが [1-3]、こうして構成され綴じられた同一の論文を3部作成しなければなりません。）

なお、これらのうち、第2節で詳論する「註」および「参考文献」以外の項にかんする注意事項は、以下のとおりです。

1-2-1 内表紙

ファイルのおもて表紙 [1-3-2] に準じるものを、内表紙として第1頁におきます。具体的には、

「201●年度文学部卒業論文」の表記
論文題目（副題がある場合は改行して記載）
学生証番号
氏名

が明記されている必要があります。

1-2-2 要約

800字程度の量を目安に、論文の本文を要約します。

1-2-3 目次

本項で触れる要約から資料等にいたる項目に加え、本文については章（あるいは節）にいたるまでの構成も記して、それらすべての項目に、頁番号を記します。

1-2-4 本文

第1章、第2章、…と複数の章をもって構成し、論理的に論述を進める必要があります。

また、それら複数章による部分を本論とした枠の両端に「序」（あるいは「はじめに」）と「結び」（あるいは「おわりに」）をおいて、それぞれに問題の所在や今後の展望を記すのもよいでしょう。

さらに本論も、章のみでなく、階層構造を意識した部・章・節の区分を設けることも可能ですし、ときに必要ですらあるでしょう。

いずれにしても、本文の構成は考察の内容と不可分の関係にあるものですから、教員の指導を受けながら慎重に決定することが重要です。

[1-2-5の項として扱われるべき「註」については、2に詳述]

[1-2-6の項として扱われるべき「参考文献」については、2に詳述]

1-2-7 図表・資料等

図表は、一連番号を付しそれぞれ簡潔なタイトルや説明もつけたうえで、本文中の参照している位置に貼り込むか、独立した頁にして本文中に綴じ込みます。単位などを忘れないことはもちろんですが、線も実線、鎖線、一点鎖線などを用い、多色による区別は避けるようにします（特別な理由がない限りモノクロで出力します）。

また、論文に添付される資料類がファイルに綴じるのに適さない量や大きさを有する場合は、前もって指導教員の指示を仰いでください。

1-3 綴じ方（ファイル、おもて表紙の表記、etc.）

以下の条件に沿ったサンプルを共同研究室に用意していますので、参考にしてください [この節のあとのコラムも参照]。

1-3-1 綴じ方

上の1-2の項の説明にそって構成された中味を、ファイル（生協で取り扱っている）で綴じます。これと同一のものを3部作成します [1-5も参照]。ファイルについてはゼミ指導教員の指示にしたがってください。

1-3-2 おもて表紙

manaba+Rより題目用紙をダウンロードし、記入の上、表紙に貼付して下さい。

1-3-3 表紙裏

主査・副査の教員名を記す審査教員用紙（manaba+Rよりダウンロード）を貼ります。ただしこの教員名は自由に選べるのではなく、卒論の題目届け出を受けて決定され、manaba+Rに掲出されるものを正確に記載しなければなりません [1-4を参照]。

1-3-4 背表紙

ファイルの背表紙にも、年度、題目、氏名を記します。

1-4-1 題目の届け出

「卒業論文題目届」が所定の締切以前に届け出られている必要があるのはいうまでもありませんが、指導教員との事前の打ち合わせもそれにおとらず重要です。（当然すぎて、あえて理由を記すまでもないほどですが、次項に記す主査・副査の確定作業に支障をきたす可能性を付記しておきます。）

1-4-2 主査・副査の確定

上記の届け出をうけた論文審査の主査・副査は、manaba+Rに掲出されます。論文提出時には、ファイル表紙裏の審査教員用紙に正確にその教員名を記してください [1-3-3を参照]。

1-5 提出

提出締切は厳守するように。（受け付け期間は約1週間あります。さほど余裕をもって完成はさせられないにせよ、自身で早めの締切を想定して作業を進めるくらいで、むしろちょうどよいでしょう。）交通機関の遅延、ワープロやプリンタの故障など、いかなる事由によっても締切後は受理されません。

なお、3部作成した同一の論文のうち、実際に提出・受理されるのは2部で、残りの1部は執筆者であるあなたの手元に残ることになります（*）。口頭試問 [1-6] に向けて自身で再度それを読み直し、また試問時にはそれを持参するようにしてください。

（*原稿用紙を使用する場合は、原版1部とコピー2部で計3部とし、このうち原版1部とコピー1部を提出します。）

1-6 口頭試問

論文を提出しても、その後に実施される口頭試問を受けなければ単位認定されません（卒業できません）。試問の日時・場所は、manaba+Rに掲出されます。

コラム—「共同研究室より」

- 共同研究室には、決められた時間帯にTA（ティーチング・アシスタント）が詰めるようになっています。誰もが卒業論文のハードルをクリアした経験の持ち主ですから、不明な点があれば相談してもよいでしょう。ただし、アドバイスできることがあるとしても、教員による指導に直接代わるものではありませんから、その点を留意し、また基本的にこの「栞」に当たって調べることを先行させてください。
- 本文中にも記したとおり [1-3]、共同研究室には、最低限の体裁を整えたサンプルが用意されています。実際に手にとって、不明な点の解消に役立ててください。
- 共同研究室内には数台のパソコン等が設置され、学生諸君の日々の利用に供されていますが、卒業論文の提出間近になると多くの利用希望者で混雑するなどして、逆にさまざまな不具合を発生させかねません。論文の執筆は計画的に進め、また、USBメモリーの置き忘れ等のないように、論文データの管理にも注意しましょう。なお、2穴パンチなどの文具は、随時利用してかまいません。

2. 文献表記のきまり—もう少しカタチにこだわってみる

この第2節では、文献の引用やその書誌情報の掲出にあたっての形式的要求（統一や慣例の踏襲など）について触れます。

論文がいわゆる創作やエッセイと異なるゆえんは、何よりもそれが**先行研究の渉獵・整理・読解・批判**の作業のうえにたっている点に尽きます。

この書誌情報の表記の仕方は、研究領域ごとにそれぞれに慣例がある一方で（きわめて厳格にそれを守ることが求められる領域もあればそうでない領域もあります）、それ以外に自身が依拠する方法で一貫した記述がなされていることが肝要です。

さて、複数の学問領域（ディシプリン）の混成体としてある文化芸術専攻としては、それら領域ごとに微妙に異なる表記法のすべてを網羅できるものではありません。註や文献の表記については、学問分野や学会の発表媒体によって、さまざまな書き方があります。ゼミ教員の指導のもと、自分のテーマ・学問分野にもっとも適切と思われる方式を選んでください。そして、必ずゼミ教員にチェックをしてもらい、適切な表記になっているかどうか確認を怠らないようにしてください。以下に書き方の一例を示しておきます。

〈例〉

本文中で文献を引用するときは、引用文の後に1のように註番号をつけ、本文のあとに置く「註」のページにはその番号を記して、著者名、文献の題名、出版社、出版年を書き、その後に引用ページを書きます。

また、引用文献が2人の共著の場合は、引用のたびに両著者の姓を書きます。著者が3人以上の場合は、初出の際には全著者の姓を書き、2度目以降は第1著者の姓のみ、田中他や Smith et al., のように表記します。

参考文献についても、著者名、文献の題名、出版社、出版年が必要な書誌情報となります。もし雑誌論文を提示する場合は、著者名、論文の題名、雑誌（紀要）名、号数、出版社（もしくは学会名）、出版年が必要な書誌情報となります。また、論文集の中の論文を提示する場合は、著者名、論文の題名、論文集（文献）名、編者名、出版社、出版年が必要な書誌情報になります。

3 卒業論文を書く意味

さて、先行研究のうえに立って進められる考察が（いきなり後続の研究者によって参照される大論文にはならないまでも）、後輩の卒業論文執筆の見本となるには、さらに、論述が論理的整合性を有し、かつまた既存の研究に何らかの知見（初学者なりの）をもたらすものである、といった体裁・形式の問題を超えたプラスアルファの要素＝内容が求められます。

けれどもそういった問題こそは、それぞれの演習〔ゼミ〕の現場で各指導教員の責任において教授されることがらでしょう。そこでここでは、なぜ卒業論文を書くのかという総論的内容を記して、この葉のまとめとしておきます。

*

卒業論文は、みなさんがひとつの主題について自分の考えをまとめ、他人の評価を求めるたいへん重要な機会として課されています。論文の作成は4年間の大学生活の集大成であることはもちろんですが、文章をつうじて他者の評価を待つという、社会生活を送るうえでもっとも基本的な活動の最初の本格的な試みとなるのです。

一定の時間のなかで、自分自身の主題を見つけ、資料を集め、分析し、文章化し、繰り返し読んで手を入れ、そして完成するという過程は、各種の講読、実験、演習などによって身につけてきたはずです。卒業論文では、自分を凝縮して文章に盛り込んでゆくこの作業を、今まで以上に集中して、高い密度でおこなうことが求められます。

しかもその主題設定においては一定の独創性を、資料収集においては個性的な視点を、分析においては鋭さを、文章においては読み手を引き込む説得力を求められます。そしてこうした要件こそは、どのようなかたちであれ、あなたが社会に出て、自らの主張を文章をつうじて発する上で求められる要件にほかならないのです。

*

最後にくりかえします——この葉に記された事柄は、文化芸術専攻教員が最低限必要と合意した標準的な内容ばかりですが、個別の論文の内容がここからの逸脱を要求する場合もあるかもしれませんし、逆に指導教員がすすんで特別の指示をあたえる場合もあるでしょう。

極端な話、ここにシロと書かれてあってもゼミでの討論と教員の指導から得られた結論が、クロであればクロとするぐらいに、じっさいのゼミの内容を重視して、本冊子はあくまでも補足的なものであると了解してください。



テーマリサーチ型ゼミナール (TRS)

テーマリサーチ型ゼミナール (TRS) (科目名:「ゼミナールⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」) とは、各専攻の専門演習Ⅰ～Ⅳ (3・4回生配当) とは別に、全学域・全専攻の学生を対象として設置された卒業論文作成のための演習授業 (ゼミ) です。テーマリサーチという名称の通り、ゼミ毎にテーマを設定し、そのテーマに興味のある学生が所属専攻を問わず集まって、それぞれの関心や専門知識を元に、そのテーマに関連する具体的な研究課題 (卒論テーマ) を設定し考察することで、様々な角度からゼミの掲げたテーマを追究するというゼミです。

毎年度、テーマの異なるゼミが4クラス開講されます (原則として3・4回生の2年間のみの開講となりますので、2年間で卒業できなかった場合 (留学・休学含む) は、所属専攻のゼミに所属することになります)。

TRS は、受講生それぞれが所属専攻での学びに軸足を置きながら、専攻を異にする学生と共通のテーマについて討論する機会を持つことを通して、受講生がテーマに対する考察を多角化かつ深化させる場として提供するものです。そのため、受講に関して下記の規定があるので注意してください。

1. 受講条件

- ・2回生秋学期終了時点での一定の単位取得を受講の条件とする (詳細は別途お知らせします)。

2. 受講者の選抜

- ・受講希望者が提出した志望理由書に基づいて書類選考もしくは面接を行い、受講の可否を決める。

3. 受講方法

- ・TRS 受講生は、受講を許可された TRS を3・4回生の2年間受講すること。
- ・TRS 受講生は、3回生時には TRS のゼミ (「ゼミナールⅠ・Ⅱ」) に加えて所属専攻のゼミ (「専門演習Ⅰ・Ⅱ」、登録必修) を受講すること。4回生時には、TRS のゼミ (「ゼミナールⅢ・Ⅳ」) のみ受講してもよいし、TRS と所属専攻のゼミ (「専門演習Ⅲ・Ⅳ」) の両方を受講することもできる。

4. 成果物 (2016年度以降の「卒業論文」提出についての取扱いです)

- ・単著による卒業論文の他に単独制作による卒業制作も認める。ただし、後者についてはゼミ担当教員が認めた場合に限る。

